

3 遺構外出土の遺物（第II-41～114図、写真図版17～67）

遺構外出土の遺物の総数は164,315点であり、本遺跡調査出土遺物総点数(169,137点)の97.1%を占める。これは、調査区内支沢を中心とした包含層遺物の大量集中出土に起因するものである。詳細については総括において後述するが、縄文時代中期～後期の各段階遺物が明確な層序をもとに重複・混在して出土していること、各期遺物の分布の傾向、遺構群が帰属する時期とそれを被覆する包含層内遺物の年代的逆転などの状況を勘案し、調査区外後背高地に位置する何らかの別時代遺構・堆積（例えば盛土等に類するもの）が存在し、それらから流入・流下したものを含む可能性が考えられる。

(1) 土器（第II-41～82図、写真図版17～53）

I群：縄文時代早期（第II-41図-1、写真図版17）

本遺跡における当該時期資料は極めて少ない。1は自縄自巻縄による羽状縄文を施す薄手の胴部破片で、東鉄路IV式に相当するもの。

II群：縄文時代前期（第II-41図2～13、写真図版17）

いずれも前期後半、円筒下層式に属するもの。2は円筒下層b式、3は円筒上層c式の口縁部破片。4～13は円筒下層d式。口縁部に文様帶をもち横走する撚糸文を施す。胴部には原体の縦回転押圧による撚糸文（4・5・10）や多軸絡条体压痕文（6～8）などが地文として施される。さらにその上から結束第一種原体による結節（10）あるいは沈線（11）などを巡らせ胴部文様帶をさらに水平等分するものもある。4～7は円筒下層d1式で、口縁部文様帶と胴部文様帶は結束第二種原体による綾格文で区画する。8・9は円筒下層d2式。刺突列を伴う微隆起（8・9）によって文様帶を区画している。12・13は器形・文様帶構成等は円筒下層d式に類するものの、口唇部への短縄線キザミの発達・文様帶区画の明瞭化（貼付帶の肥大化）・胴部地文原体の横回転化（副次的に胴部文様帶の水平等分に用いられていた要素である結束原体縄文の主文様化）など、より次段界である円筒上層a式に近しい特徴を示しており、両型式間の遷移段階に相当するものと考えられる。

III群：縄文時代中期（第II-42～60図、写真図版17～36）

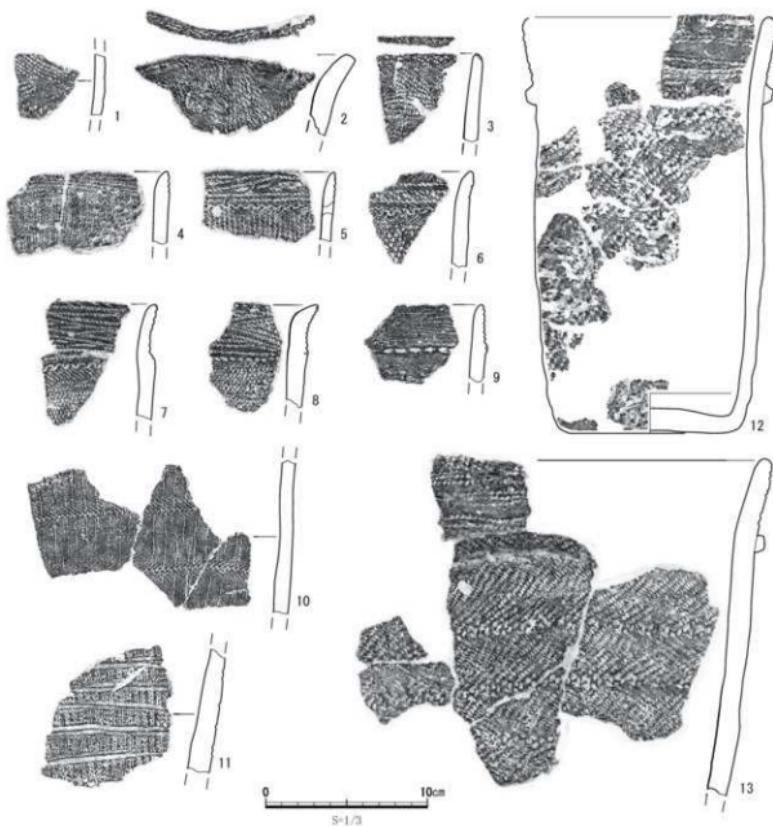
III群A類（第II-42～58図、写真図版17～34）

前期前葉～中葉、円筒上層式に属するもの。本遺跡において出土遺物の主体をなし、復元状況も良好であるが同期に帰属する遺構の検出は集中出土地点より距離を置いた位置で検出された円筒上層終末期とみられるフ拉斯コ状土坑のほかはみられず、これらを包含する土層がより後…中期後葉・後期…の遺構を被覆する状況であった。本節冒頭で述べた通り、調査区近隣に当該期の盛土等が存在し、そこから流水等なんらかの要因によって流下堆積したものと想定される。

III群A類1種（第II-42～52図14～26、写真図版17～29）

円筒上層式前半、a～c式に相当するもの。口縁部文様帶と胴部文様帶の区画が明瞭で、口縁部文様帶は平行撚糸（縄線）文キザミを密に付与した幅広の貼付隆帯文間に平行撚糸（縄線）文・馬蹄状縄圧痕等の刺突列を組み合わせ充填することによって描かれる。口唇部は肥厚し、鋸歯状の隆帯文・縄線文などにより装飾される。原則として地文は区画より下位・胴部文様帶にのみ施文され、原体として結束第一種縄を主に用いほぼ等間隔で水平方向に回転押圧される。施文の際は結束部を中心に原体両開端まで隈なく押圧しており、器面に開端を結紮した系の痕が遺る例が多い。器壁は厚手で焼成は良好である。

14～18は円筒上層a式に相当するもの。口縁部文様帶は垂下する隆帯により4等分され、口縁部文様帶は同撚異撚混在する複数条一組の平行撚糸（縄線）文による鋸歯状文などにより充填される（14～16）。17・18は頸部にくびれ・肩部に膨らみをもつ深鉢。口縁部文様帶は無文（17）または縄線文のみ



第II-41図 遺構外出土の土器(1)

が施され(18)、胴部施文回転方向が前段階・円筒下層式にみられる縦方向であることなどを勘案し、円筒上層式の初段階に属するものと判断したもの。

19~22は円筒上層a式からb式の遷移段階と想定されるもの。極めて幅広の垂下降帶(19・20・22)や鋸歯状平行繩線文(21)など円筒上層a式の要素を有しながらも、やや屈曲の弱い馬蹄状繩圧痕列が施されるなど、円筒上層b式の要素もみられるものをこれに分類した。

23~51は円筒上層b式に相当するもの。口縁部を垂直区画する垂下文は多条化・複雑化し、幅広の隆帶によって区画され繩線文・馬蹄状繩圧痕などで充填する一箇の文様帶を構成するようになる。これに対応して口縁部突起も発達・大型化し弁状を呈する。器形は概ね底部でやすぼまる円筒形を呈し、口縁部で大きく広がる(23~46)。大型のもの(23~27)もあり、最も長大なもの(27)で器高は約70cmに達する。口縁部文様帶の文様構成は口縁突起下の垂下文様帶を軸として展開され、その間は平行繩線文

と馬蹄状縄圧痕列を交互に横走施文するのみで肋骨様を呈するものが多い（24～26・28～36・38・39・42～44・46）が、隆帶を加えるもの（27・37・40）もある。口縁部・胴部の文様帶区画は壇状の隆帶によってなされ、多くは2条一組（23～25・27～28・30～35・37・38・40～43・46）であるが、1条のみ巡るもの（26・29・36・39・44）もある。2条一組の場合、途中縱位・斜位などの貼付隆帶によって区画されるもの（23・25・28・30～32・34・35・37・38・41・42）、平行縄線文・馬蹄状縄圧痕列により充填されるもの（25・28・32～34・41）がみられる。47～58は平縁のもので、肩部の張り出し・頸部のくびれなど、口縁突起を有する円筒形の個体とやや異なる器形的特徴を呈する。垂直区画の基準となる突起がないためか、垂下文様帶を持たずに口縁部文様帶が展開するもの（47・48・53・54）、口縁端部側縁につまみ・ボタン状の突起を設けるもの（50・53・54）・隆帶文が口縁部文様帶に広く展開するもの（47・48・51・53・54）など文様構成も口縁突起を有するものとはやや異なる。49・52・55～57・58は地文のみを口縁端部を除く全面に施文する同形の個体。

59～73は円筒上層c式に相当するもの。円筒上層b式と器形・文様構成・モチーフ等で近似するが、馬蹄状縄圧痕列が刺突列に置換されている。円筒上層b式ではほぼ例外なく馬蹄状縄圧痕列と並列して施文されていた平行縄線文が略される個体（59・62・64・68・69・71）もある。刺突列の施文に使用されるものは角形工具（59・61～64・70・71・73）のほか、棒状工具（60・66）・稈（68・72）など多様である。また、円筒形・平縁形を問わず隆帶文が口縁部文様帶全面に展開するものが多く（59～66・68・71～73）、隆帶が主たる文様要素となる次段階・円筒上層d式への遷移をうかがわせる。

74～76は器形・文様帶構成などに円筒上層式前半の特徴を有しながらそれらに特有の馬蹄状縄圧痕列・刺突列などの文様要素をもたない個体。円筒上層c式-d式の中間型式の可能性がある。

なお、円筒上層b式・円筒上層c式については、付着炭化物の遺存状態が良好であった各1個体ずつについて放射性炭素年代測定を実施しており（III章）、上層b式資料（第II-50図-53）では $4,740 \pm 20\text{BP}$ 、上層c式資料（第II-51図-61）では $4,500 \pm 20\text{BP}$ という結果が得られている。

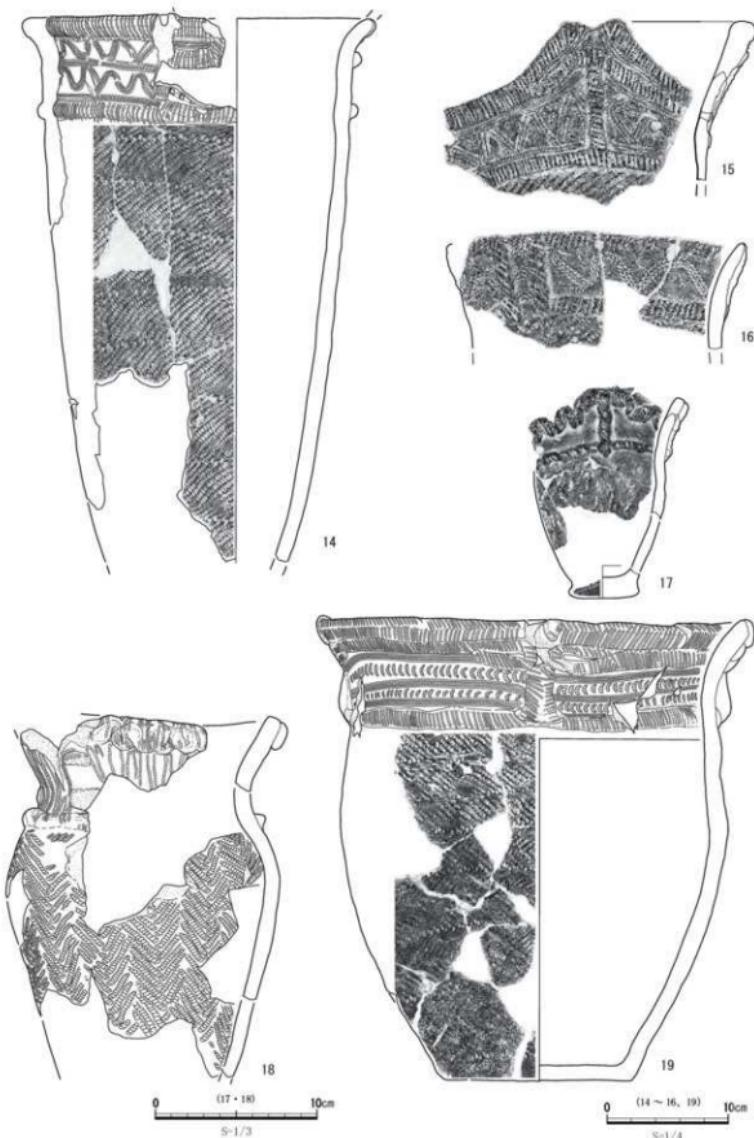
Ⅲ群A類2種（第II-53～58図77～105、写真図版29～34）

円筒上層式後半、d・e式および道南地域における上層式終末型式である見晴町式に相当するもの。

77は細めの貼付隆帶による弧状文など円筒上層d式の特徴を有しながら、円筒上層c式の特徴である刺突列が施文される口縁部破片。両型式の中間型式のうち上層d式寄りと想定される資料。

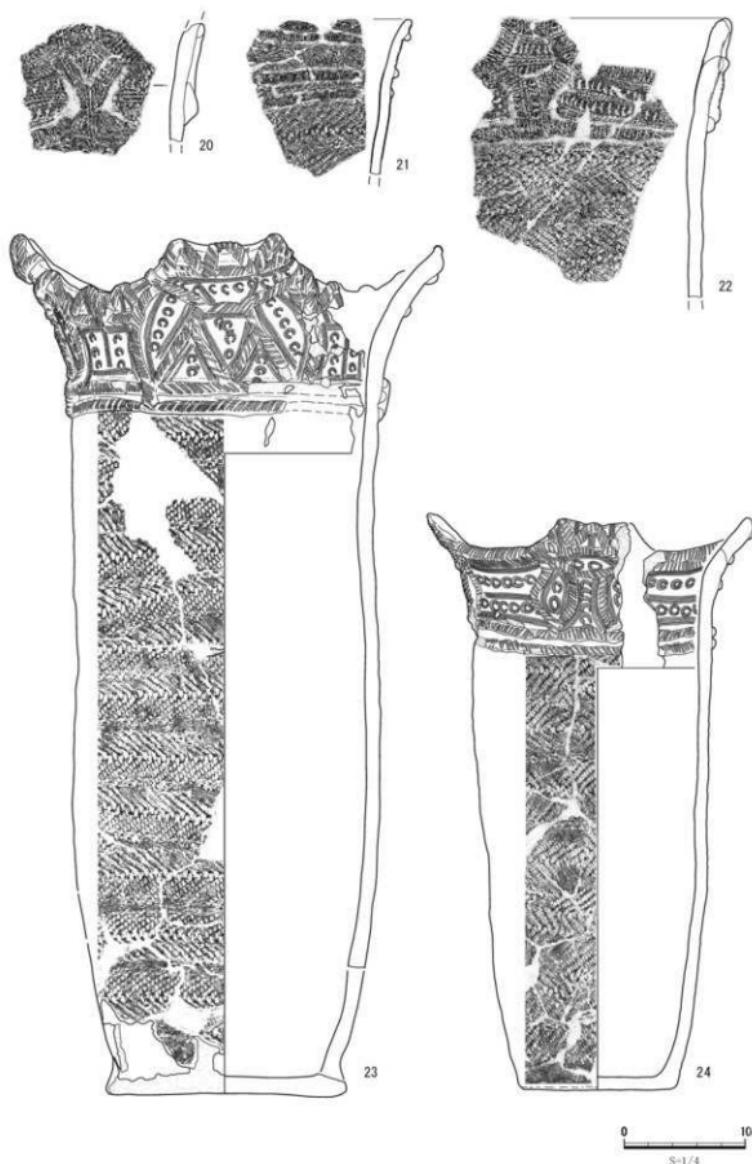
78～92は円筒上層d式。器面に広く展開する隆帶文を特徴とする。口唇部は肥厚するもの（78・82～85）もあるが総じて薄くなり、装飾も隆帶文（78・82）から斜行する縄線文（83）・縄線キザミ（80・81・85～88・90～92）が多くなるなど前段階と比して簡素である。地文は胴部全面に施文されるようになり、隆帶文が胴部中位から下半近くまで施されるようになるなど、文様帶区画は曖昧になる。地文原体としては結束第一種のほか結束第二種（85）が用いられる。施文単位の重複・切り合いが目立つようになるなど、円筒上層式前半のような水平・等間隔の地文施文はまれになり、開端結紮系痕もほぼみられなくなる。隆帶は前段階に比して細くなり、付与される装飾も前段階に比して粗めの燃糸キザミ（78・79・82・83・86）や、縄文（80・92）・平行燃糸押圧（81・91）あるいは装飾そのものを行わないもの（84・88・89）など多様化する。文様モチーフとしては肋骨様のものと弧状のものが混在する。82～84は把手状の側面突起を有する個体。いずれも平縁で、円筒上層b式にみられた側縁につまみ状突起を作出する平縁個体の系譜に連なるものと想定される。

93～100は円筒上層e式。いずれも円筒上層d式にみられる肋骨様モチーフを沈線で描く。地文原体は結束しない単節縄が用いられ、斜行縄文が器体全面に施される。口唇部装飾は縄線（93・95～99）あるいは棒状工具（94）によるキザミが施される。93はやや幅広の口唇に沈線が施文されるもので、大木8a式あるいは榎林式に同様の口唇装飾がみられることから、それらとの関連・影響を想起させる。97～99は、精緻な調整・装飾を施した山形の突起を有する口縁部片。本遺跡出土の同時期資料と器質等にお

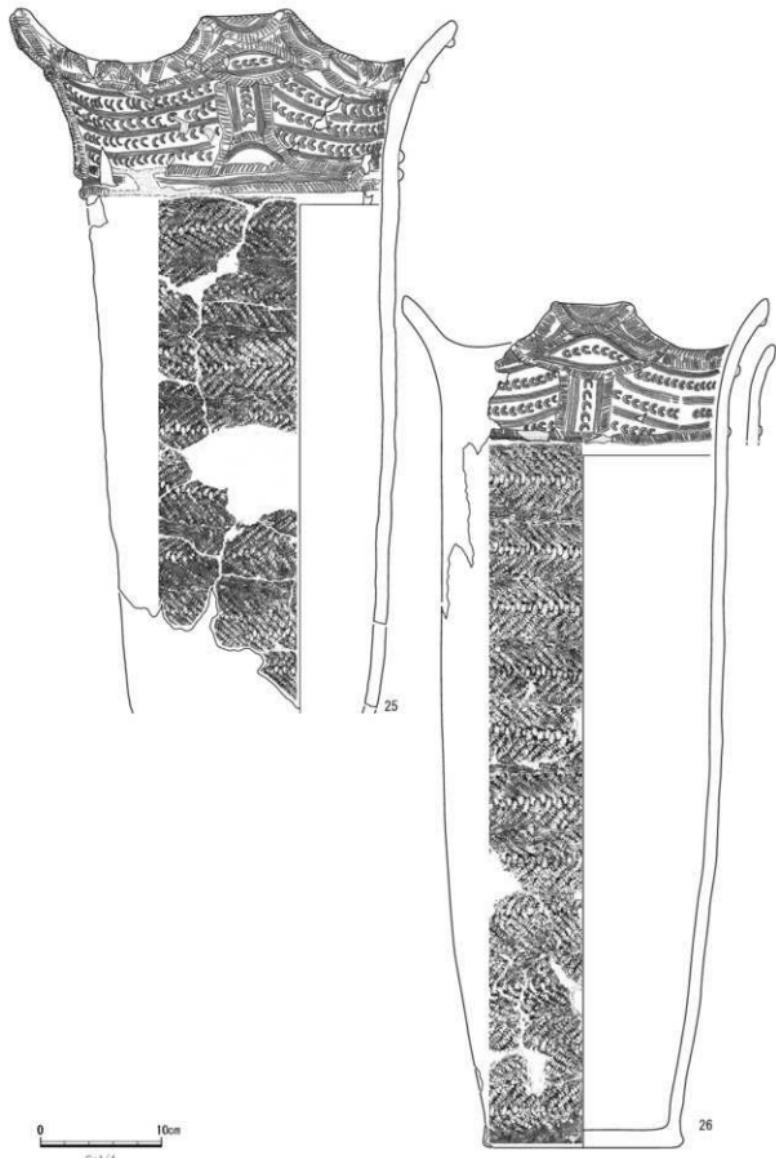


第II-42図 遺構外出土の土器(2)

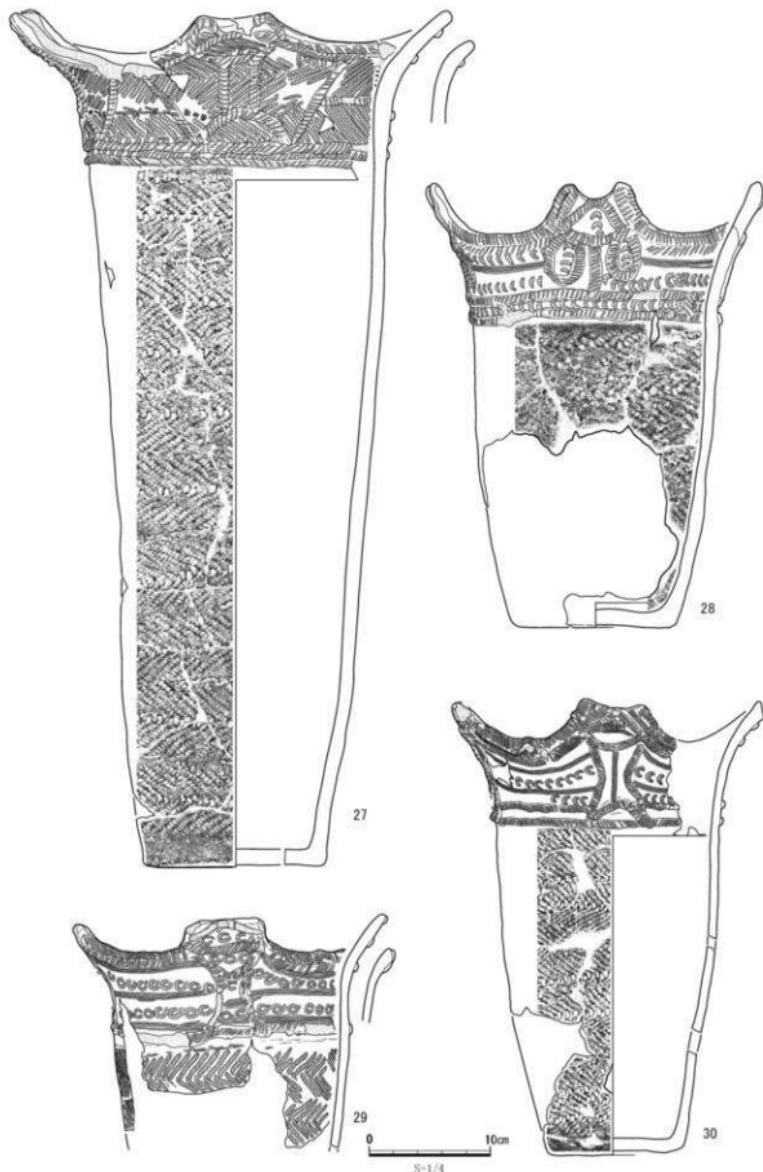
II 発掘調査における成果



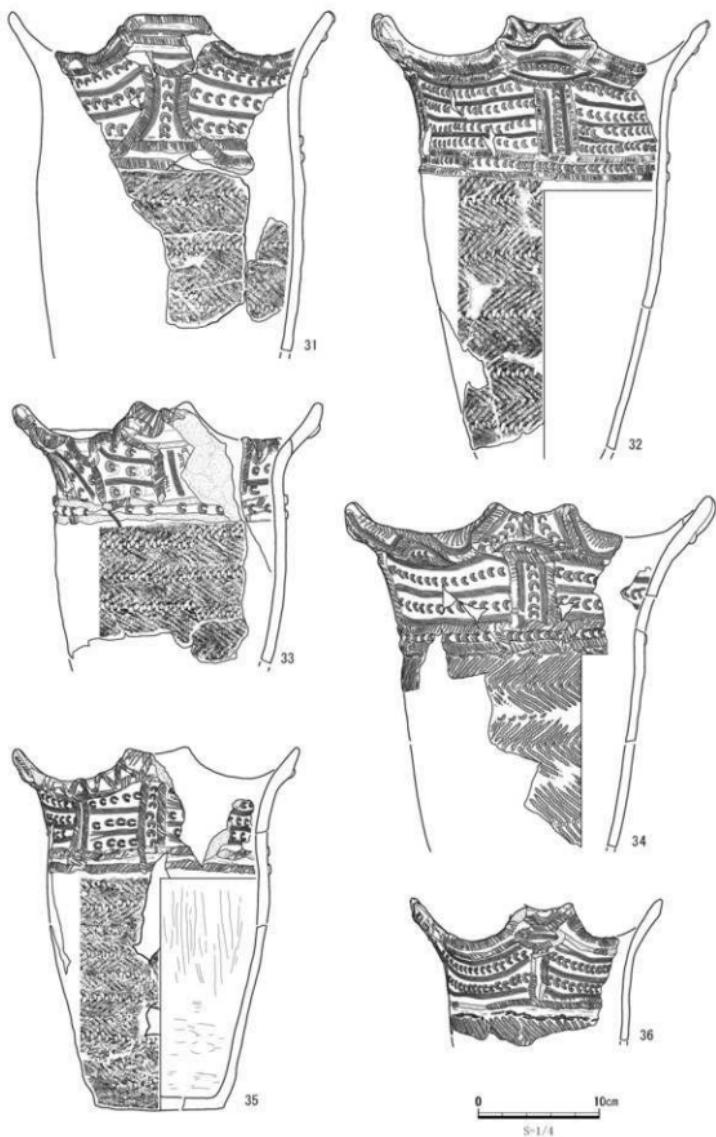
第 II-43 図 遺構外出土の土器 (3)



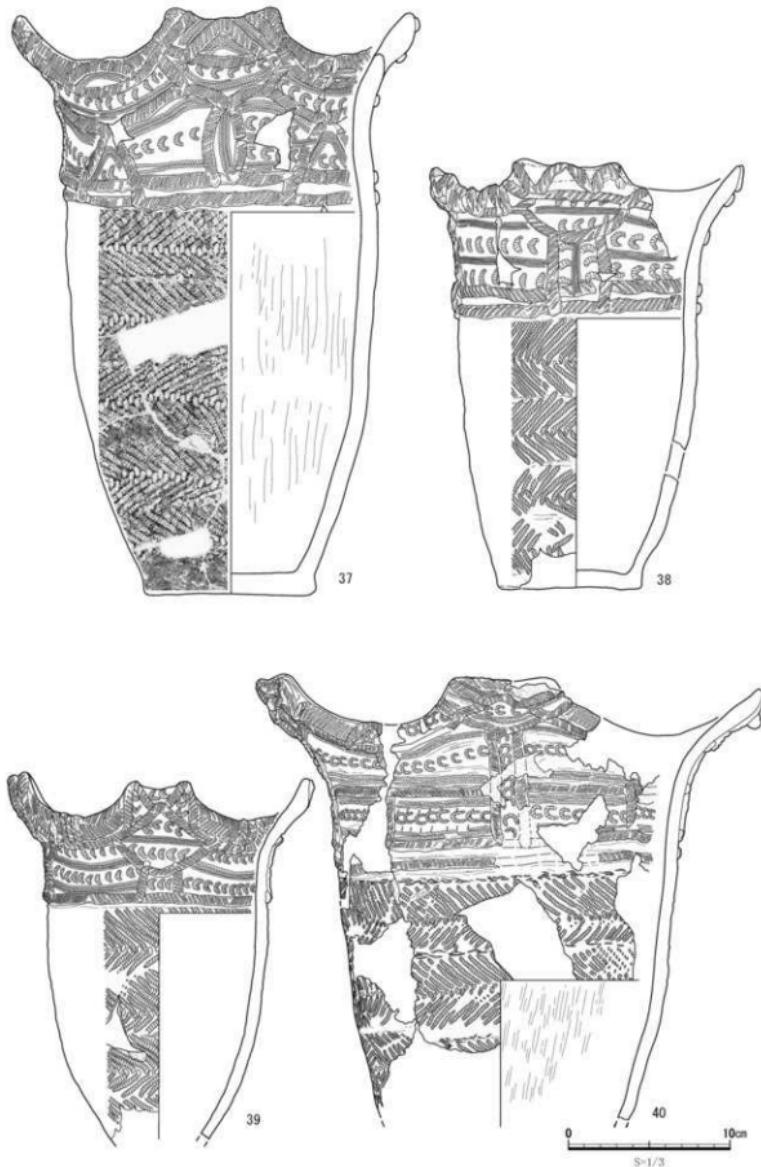
第II-44図 遺構外出土の土器(4)



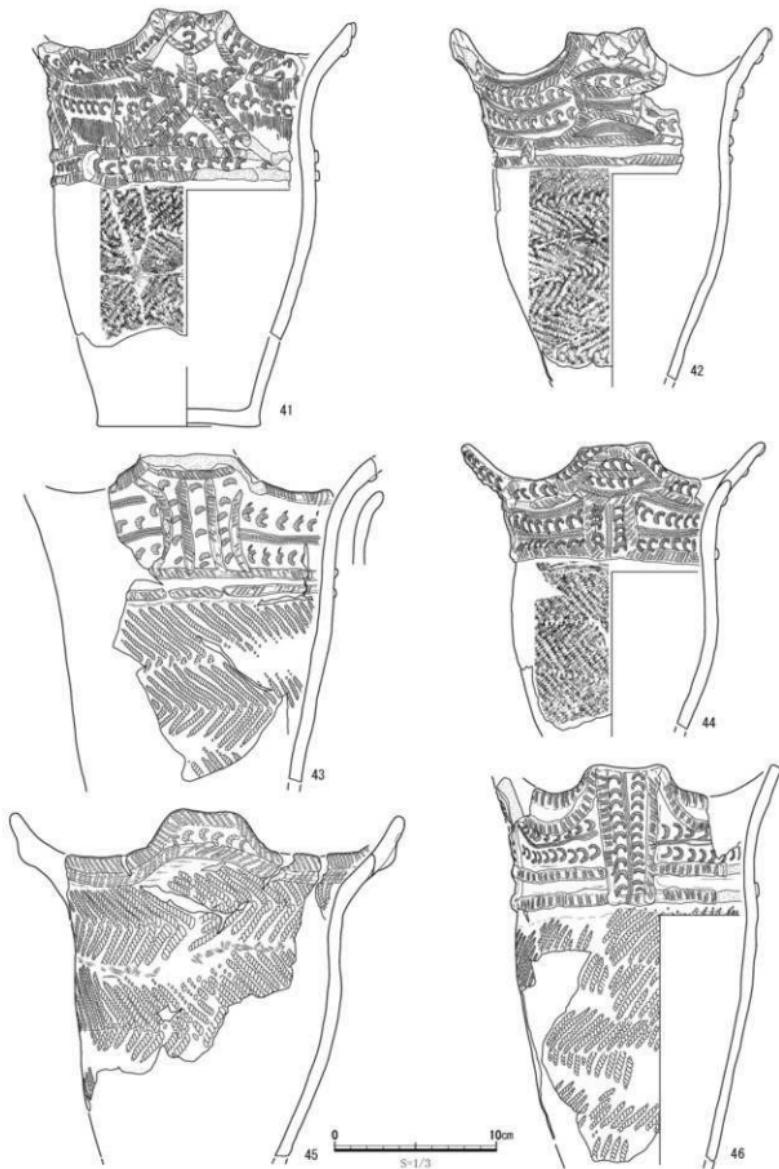
第 II-45 図 遺構外出土の土器 (5)



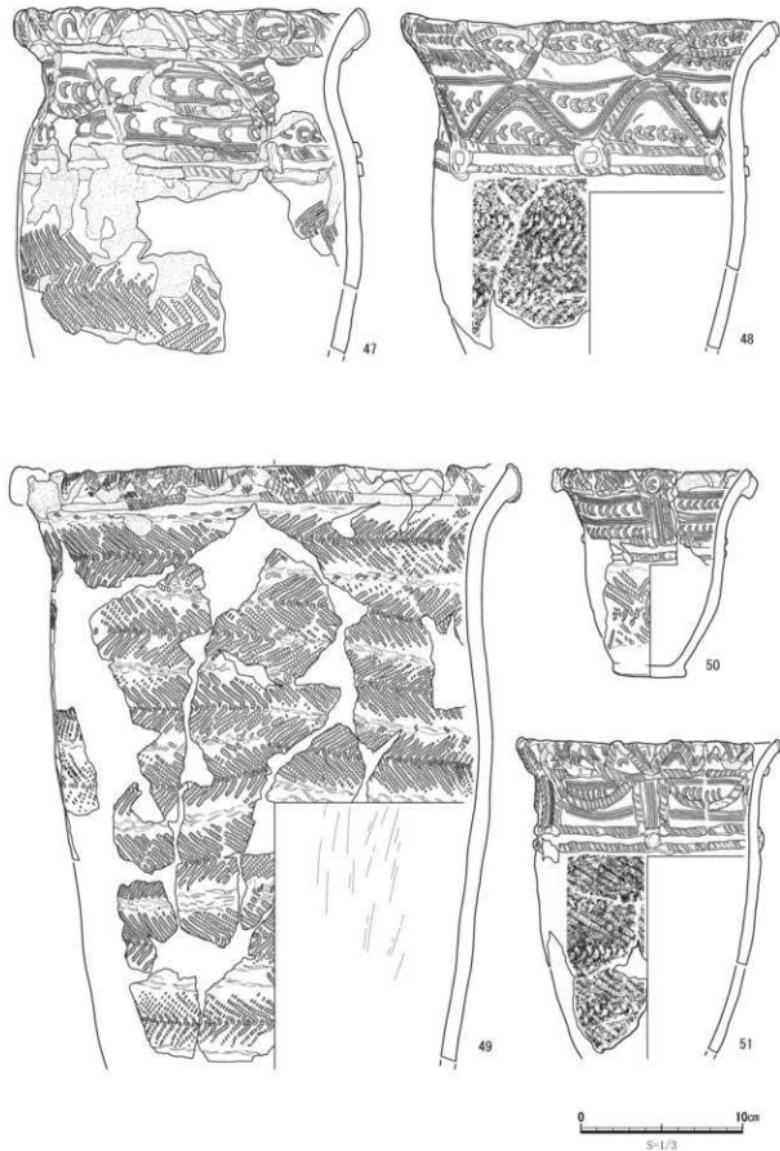
第II-46図 遺構外出土の土器(6)



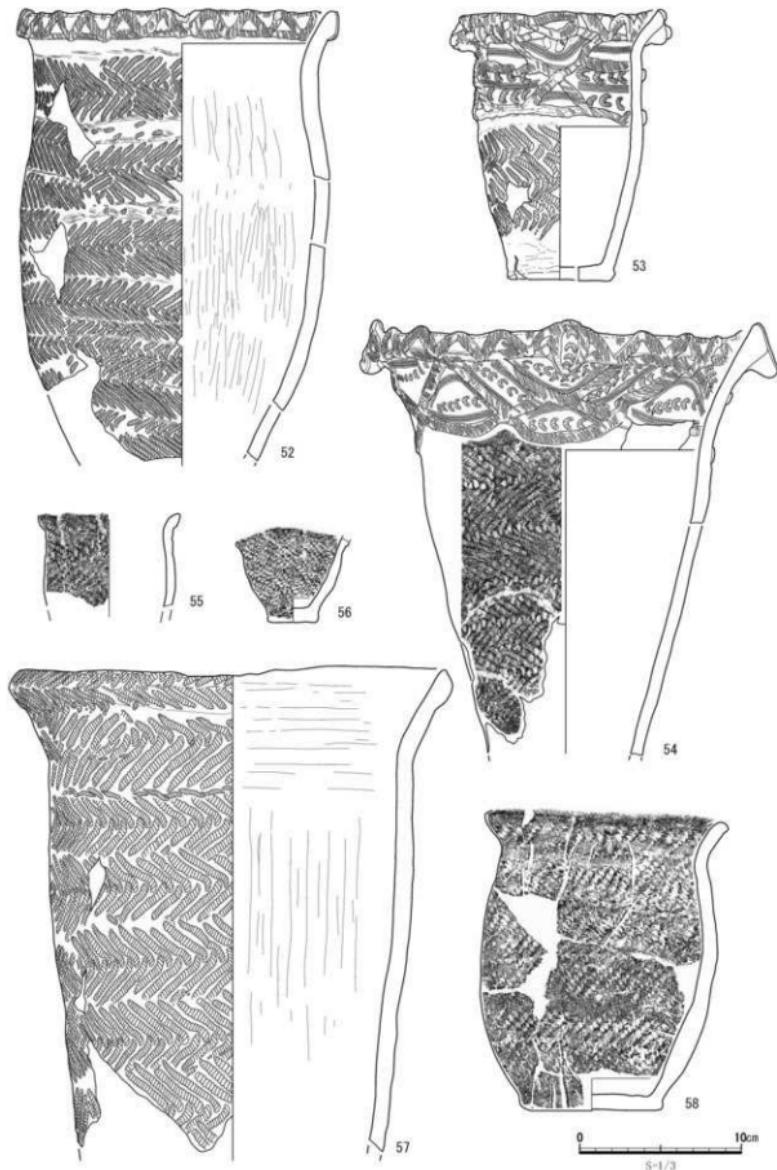
第II-47図 遺構外出土の土器(7)



第II-48図 遺構出土の土器(8)



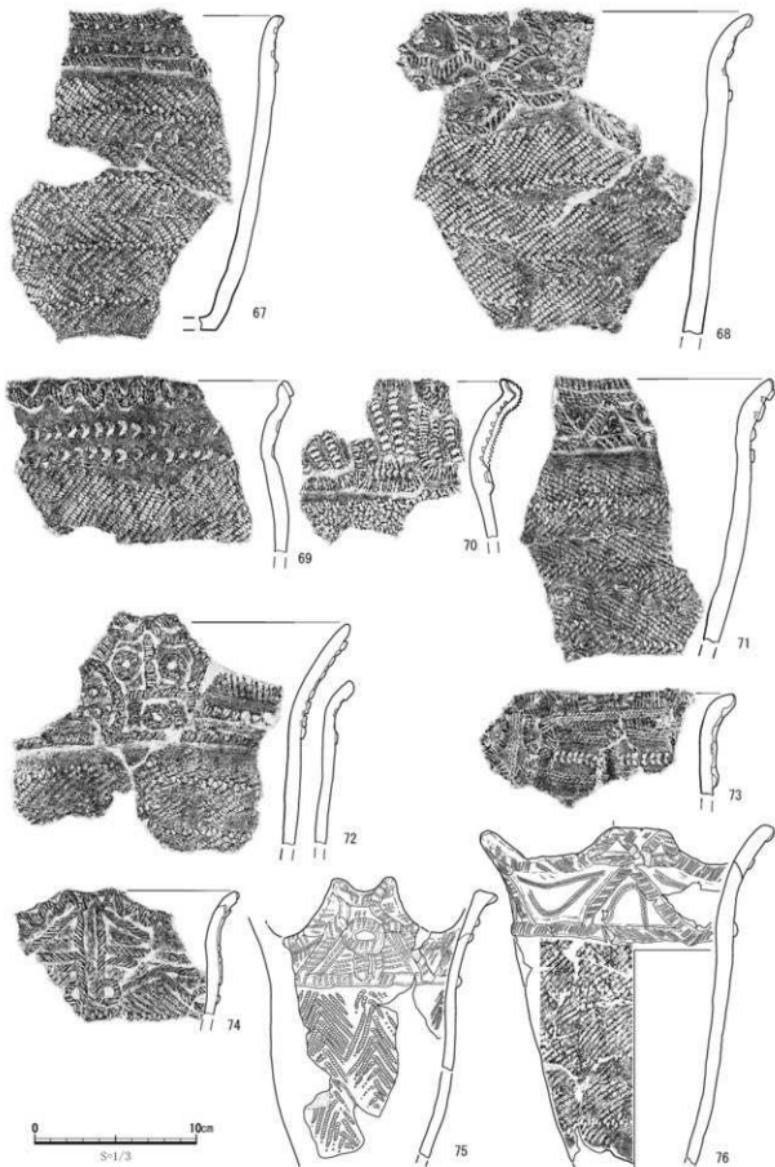
第II-49図 遺構外出土の土器(9)



第 II-50 図 遺構外出土の土器 (10)



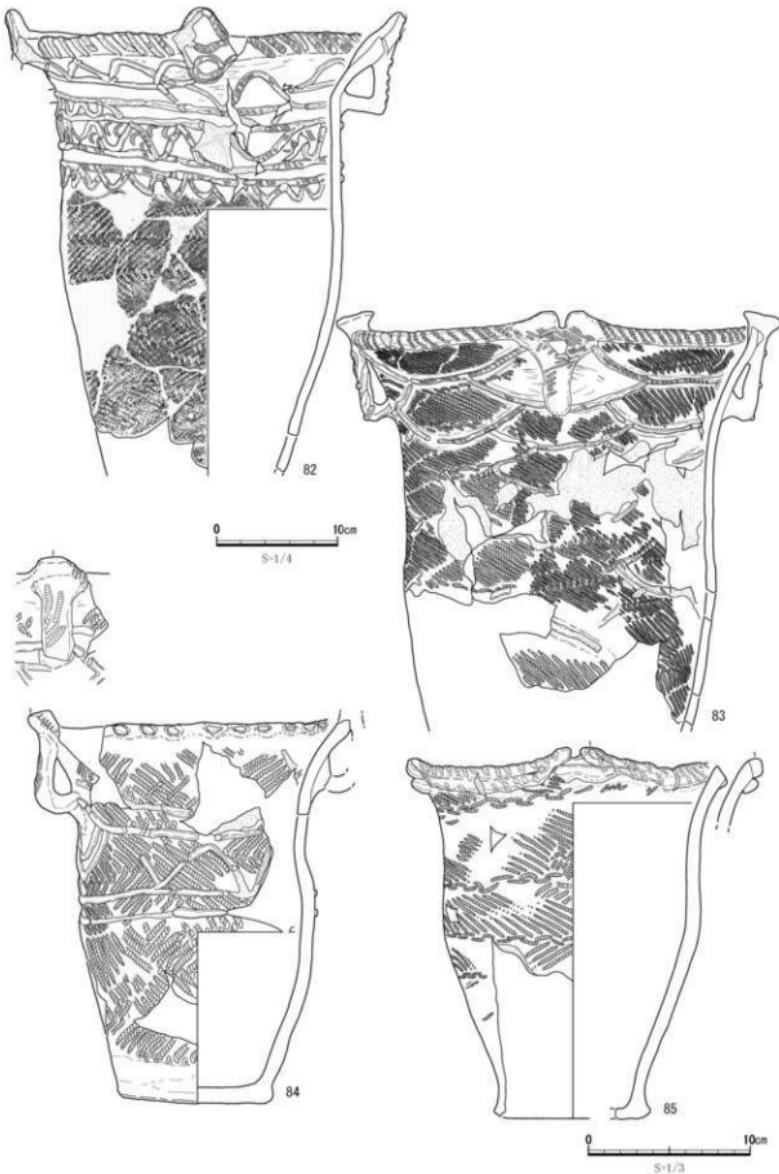
第II-51図 遺構外出土の土器(11)



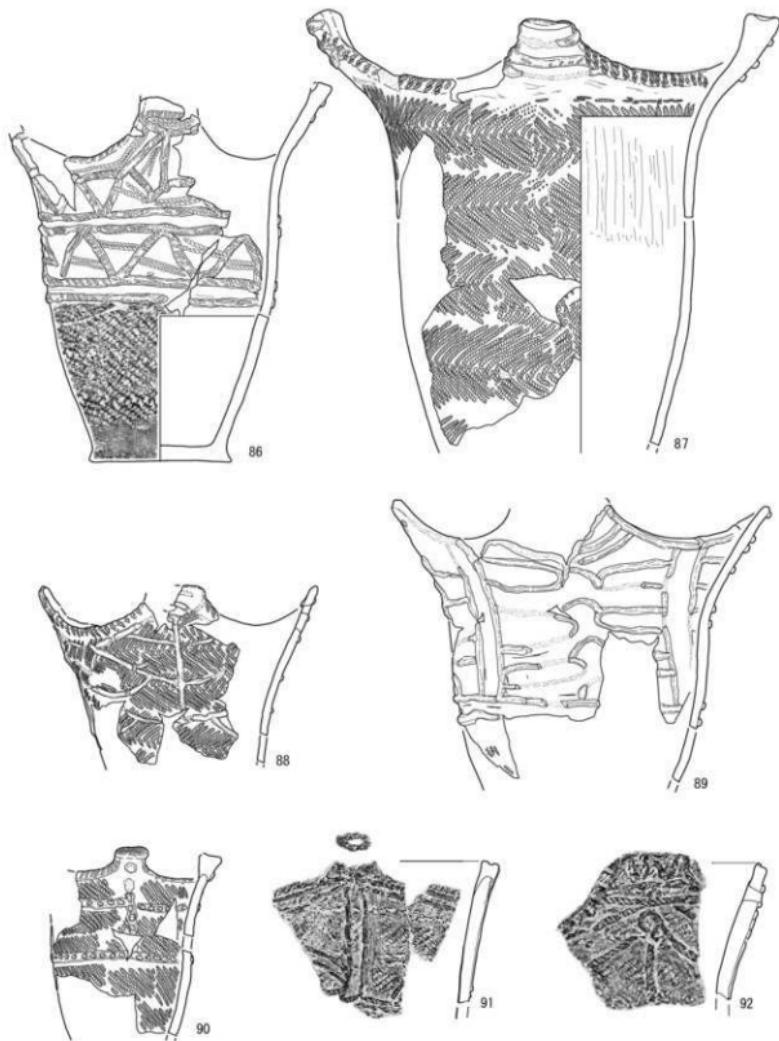
第II-52図 遺構外出土の土器(12)



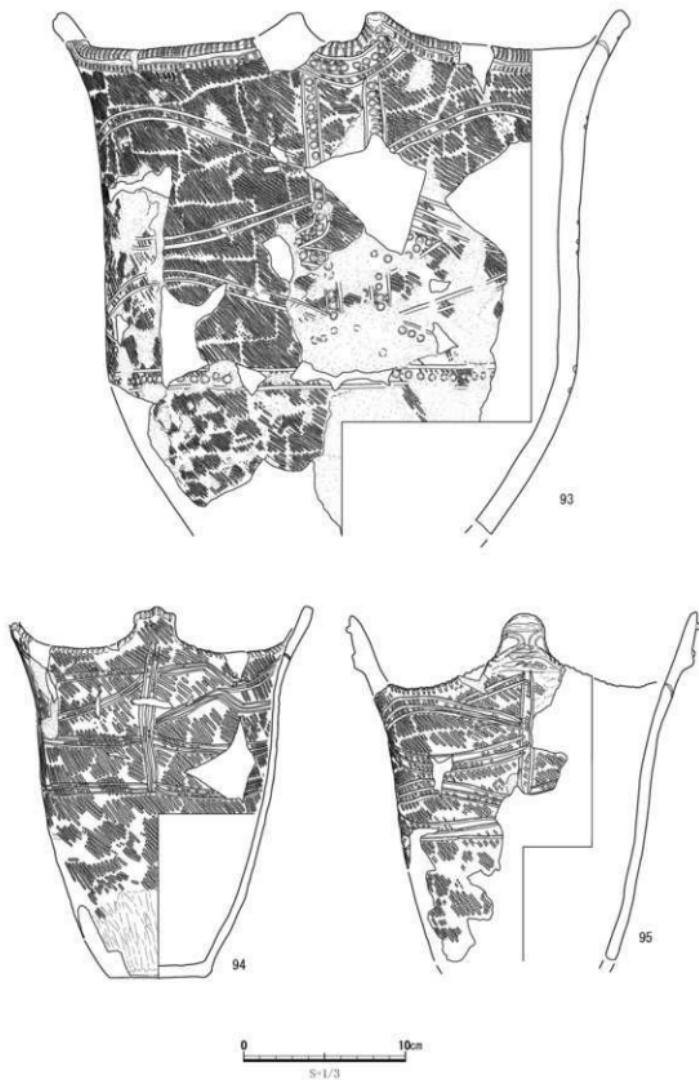
第 II-53 図 遺構外出土の土器 (13)



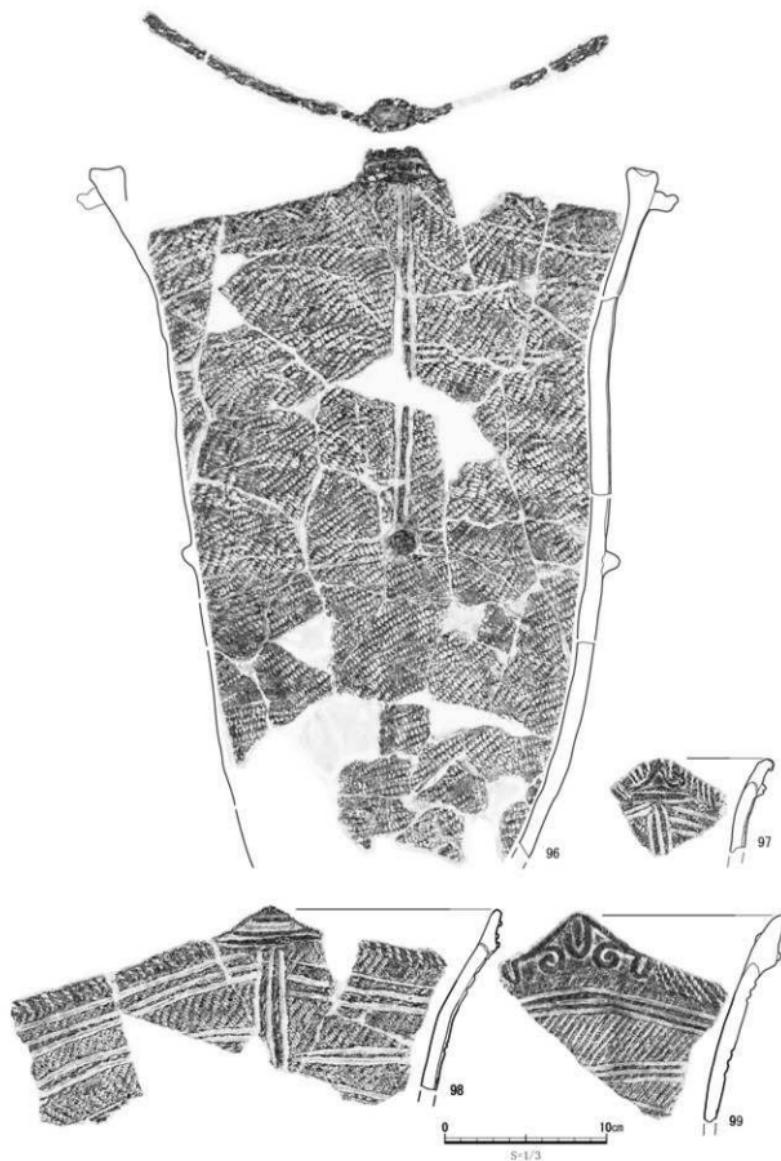
第 II-54 図 遺構外出土の土器 (14)



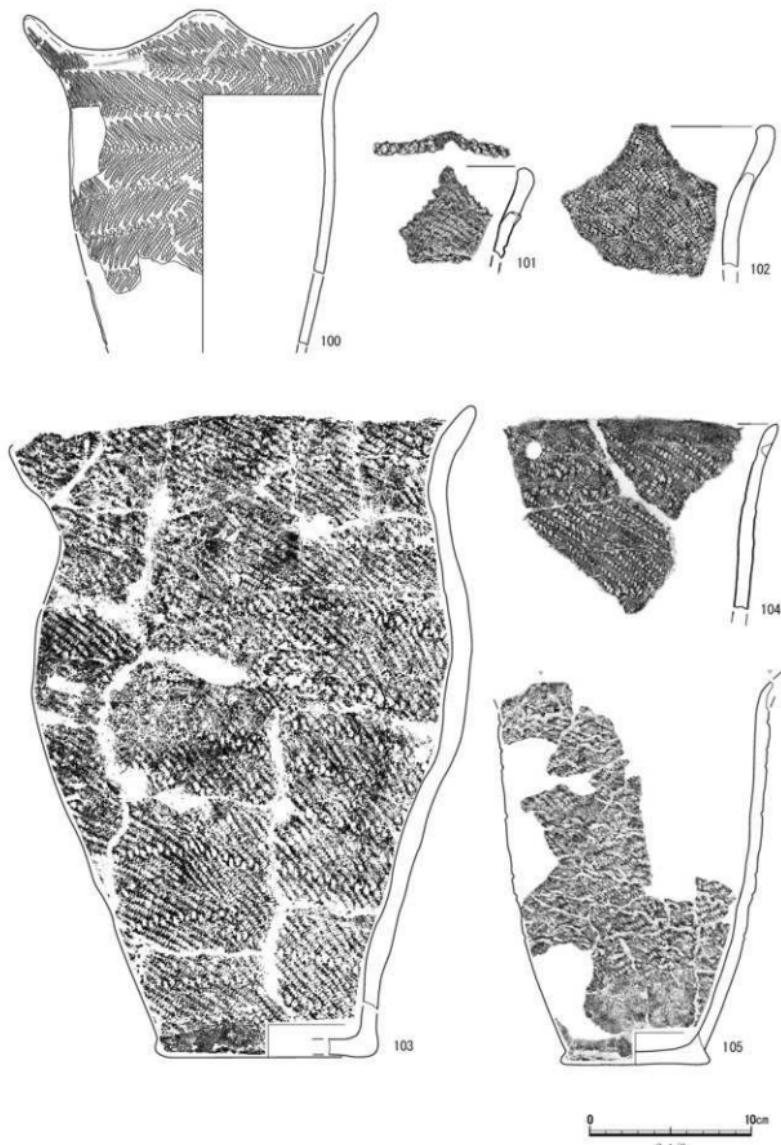
第II-55図 遺構外出土の土器(15)



第 II-56 図 遺構外出土の土器 (16)



第二一 57 図 遺構外出土の土器 (17)



第II-58図 遺構外出土の土器 (18)

II 発掘調査における成果

いて異質であり、搬入品の可能性が高い。100は地文のみを施文する深鉢。

101・102は見晴町式に相当するもの。いざれも地文のみを施文する山形突起を有する口縁部片。

103は地文のみを施文する平縁の深鉢。地文の施文単位が不規則に重複することから円筒上層式後半に相当すると考えられる個体。104は結束第一種縄文を施文する口縁部片。105は地文施文後に縄結節の回転押圧による綾絞文を密に付与する個体で、円筒上層式後半の深鉢。

III群B類（第II-59・60図106～129、写真図版34～36）

縄文時代中期後葉の土器群。本遺跡構造のうち一群は、形状・出土遺物等から判断して、この時期のうち大安在B式～ノダップII式期に帰属するものと想定される。

106・107は榎林式に相当するもの。垂下あるいは水平に沈線文を配し方形のモチーフを描く個体。

108～113は大安在B式に相当するもの。頭部にくびれを持ち口縁部で大きく開く器形をもつ。原体の斜め方向回転押圧による横走縄文を主たる地文とし、頭部下端で区画される口縁部文様帶に、縄線文あるいは頂部に縄線文を沿わせる厚めの隆帶により方形のモチーフを描く。

114～116は地文のみが施される深鉢であるが、器形や地文の施文方向等から大安在B式の新手～ノダップII式に相当すると想定されるもの。117は無文であるが器形等より同期と推定される小型の深鉢。

118・119はノダップII式に相当するもの。くびれをやや残す器形に、原体の斜行回転押圧による横走（118）あるいは綾走（119）縄文を施し、頂部に縄線文を沿わせる微隆起帯によって装飾するもの。

120～129は煉瓦台式に相当するもの。120～127は、施文構成はノダップII式に近似するものの、微隆起帯に付与されるものが短刻線列・刺突列である。地文縄文は從前の斜め方向回転押圧による横走縄文（123・126）のほか、後期初頭の土器群において主体となる綾回転押圧による斜行縄文（120～122・124・125）がみられる。128は肩部に張り出しをもつ深鉢の口縁部一胸部片。地文縄文はRL原体の綾回転押圧による斜行縄文で、刺突列を付与する貼付隆帶文を水平・瘤状および垂直に施す。129は半完形の深鉢で、瘤状の隆帶を口縁端部・口縁部および胴部に複数巡らせたのち、LR原体を綾回転押圧した斜行縄文を地文として施している。瘤状隆帶上には横回転押圧して斜行縄文を施したのち刺突列を付与している。口縁で内傾する器形、口縁部の瘤状貼付帯による区画など、大木系の影響も伺える。

IV群：縄文時代後期（第II-61～82図、写真図版36～53）

IV群A類（第II-61～77図、写真図版36～50）

縄文時代後期初頭の土器群。

IV群A類1種（第II-61～73図130～260、写真図版36～46）

縄文時代後期初頭の土器群のうち、在地系の土器群に相当するもの。

130～156は天祐寺式に相当するもの。倒鐘形の器形をもち、口縁部および胴部に瘤状の隆帶貼付を巡らす。口縁部の瘤状隆帶は明瞭な段差をもつものが多い。原則として器面全体の地文は綾方向、「瘤」部は横方向と原体施文の際の回転方向を変えることにより、部位・文様帶を区別している。なお、これは後続する在地系土器においても基本的に踏襲される。

130・131は器形・施文等は天祐寺式の特徴をもつが、口縁端部瘤状隆帶に短刻線列を付加するもの。前段階・煉瓦台式からの遷移段階の資料。

132～137はIV群A類1種a、天祐寺式の古手。地文として縄文が器体全面に施され、複数の瘤状隆帶が胴部全般に巡らされるもの。

141～156はIV群A類1種b、天祐寺式の新手で、口縁部に瘤状隆帶で区画された無文帶を作出するものの。大木10式およびその系譜に連なる土器群のうち口縁部に無文帶を有する群（第II-74図261～278）の影響にあるものと考えられ、それらに特徴的な垂下文を模した隆帶を施文するもの（147～150・153・154）や縄文を帶状に施文するもの（155）もある。151・152・153・154・156は瘤状隆帶上に縄線

文を付与するもの。156は口縁端部の隆帯を持たないもの。

157～163はIV群A類1種bに併行するもので、縦状貼付の代わりに縄線文で無文帶を区画するもの。157・158・160は口縁突起を作出するもの。うち158は、突起下に弧状に縄線文を施しており、大木系土器群にみられるC字隆帯を想起させる。同様の弧状縄線文は163にもみられる。164～166は程刺突列により代替するもの。167は網目状の撚糸文を口縁端部に帯状に施文するもの。

168～260はIV群A類1種c、天祐寺式に後続する在地系の土器群。茂辺地4遺跡報告でIV群A類3種としていたもの（狭義の「涌元式」あるいは「涌元I式」に相当するが、同型式については報告により大木系も包括するなど定義に曖昧な点があるため本書ではその呼称を用いない）。

168～217は天祐寺式と同様の器形・施文的特徴を有するが、口縁端部に文様が収斂するもの。168～180は口縁端部に縋文あるいは他の地文原体による文様を施した縦状の隆帯あるいは折返口縁を巡らせるもの。169は地文原体結紮系の痕が稜格文様に顕著に遺るもの。176は地文原体として単軸絡条体を用いているが、胴部は縋・口縁部は横という原体回転方向は堅持されている。177・180は縦状隆帯に縄線文を沿わせるもの。181～203は口縁端部に縦状に縄線文を巡らせるもの。縄線文の原体は原則として地文縋文の原体と同一であるが、189は同一原体（LR）同士の結束第一種、190は単軸絡条体による撚糸文、197は同撚の原体を軸とした付加条、203は単軸絡条体第5類による網目状撚糸文をそれぞれ地文として施文している。200は縋結節部の回転押圧による綾格文を口縁端部と胴部に施文するもの。204～217は口縁端部に縦状に無文の折返口縁を巡らせるもの。

218～250は縦状の装飾要素を持たず地文のみを施文するもの。原体としては単節縋のほか、反撚縋（232）・付加条（238・247・250）・単軸絡条体（229・230・234～237・248）などが用いられる。218～231は無文帶または地文原体の回転方向を変えるなどして口縁部に文様帶を作出し、胴部との区画を行うもの。219・～223は口縁部で原体の回転方向を変えて幅広く文様帶を作出するもので、特に219・220は結束第一種縋を用いているため横走あるいは垂下する結束部圧痕列により原体回転方向の差異がよく見てとれる。224～227は口縁端部のみ施文方向を変え縦状の文様帶を作出するもの。229は単軸絡条体により同様の施文を行い、棒状工具による刺突を付与するもの。230は口縁端部に横回転による縋文、胴部は単軸絡条体の縋回転による撚糸文と別原体を用いて施文するもの。232～250は文様帶区画を行わず地文のみを施文するもの。

251～258は底部のうち底面に敷物痕等の遺るもの。251～255は葉脈痕の遺るもの。256は底面に縋文を施文するもの。257・258は網代痕の遺るもの。

259は丸底の浅鉢。器面に輪積痕が強く遺る。260は強くすぼまる口縁部を有する個体で、地文ならびに斐状を呈する折返口縁によりIV群A類1種と想定されるもの。

IV群A類2種（第II-74～77図261～311、写真図版46～50）

縋文時代後期初頭の土器群のうち、大木系の土器群に相当するもの。

大木10式と併行あるいは後続する土器群にみられる、口縁部の文様帶区画（無文帶の作出あるいは沈線・縋線文・隆帯刺突列等による区画）・沈線文あるいは充填縋文によって描かれる胴部の曲線文といった文様構成、口縁部で内溝あるいは胴部で強く張り出す等の器形的特徴において、在地系であるIV群A類1種とその特徴を別にする土器群である。

261～278は口縁部に無文帶をもち、刺突列あるいは弧状の隆帯によって区画・装飾するもの。261はゆるやかな小波状の口縁を有する深鉢。口縁部に刺突列によって区画された無文帶をもち、突起下に孔が穿たれ、弧状の隆帯刺突列とボタン状の貼付がなされる等、典型的な大木系の要素を有するもの。262は隆帯上刺突を縋端圧痕で施しているが、同様の文様構成を有する個体。263～267は261と同様の弧状隆帯刺突列をもつ口縁部破片。263と264、266と267はそれぞれ同一個体。268は隆帯刺突列・ボタン状貼付をもつ口縁部片。269は垂下する隆帯刺突列をもち口縁端部に刺突列を施す口縁部片。270・271

II 発掘調査における成果

は隆帶・縄線などに在地系の特徴、文様構成やボタン状貼付（271）に大木系の特徴を有する個体で、両系の折衷型式とみられる個体。272 は隆帶刺突列・ボタン状貼付を付与する小型の深鉢。273・274 は同一個体で、沈線で区画された無文帯をもつ小波状口縁部片。口唇端部に刺突列を巡らせ、突起下にボタン状貼付と垂下する刺突列を施文する。275・276 は口縁部無文帯の上端に縄線文を巡らせ、ボタン状貼付を付与する口縁部片。277 は器面全体に刺突を施し、ボタン状貼付を付与する胴部片。278 は器面全体に隆帶刺突列を展開する小型の深鉢。

279～281 は口縁部に無文帯をもたないが、小波状の口縁突起をもち突起下にボタン状貼付を施すもの。282～286 は刺突列などで口縁部文様帯を区画するもの。287 は刺突列で胴部に方形の文様を描くもので、278 に近似する。288 は小波状の肥厚する口縁突起をもち突起下に孔を穿つもの。289 は片口の深鉢。

290～309 は沈線・磨消縄文・充填縄文により大木 10 式にみられる「J」「S」字状文・波状文などを描くものとその類型。290 は口縁部に無文帯をもち、沈線と充填縄文で「J」字文を描く深鉢。有孔波頭をもつ小波状口縁、胴部の強く膨らむ器形をもつ。291～293 は同一個体で、沈線で区画された口縁部無文帯を有し、胴部に沈線で波状文を描く個体。口縁部は小波状で、口縁端部および無文帯再下端に短刻線列を巡らせ、突起下には垂下する短刻線列とボタン状貼付を付与する。器形は底部から口縁部にかけて緩やかに開きながら立ち上がるものと推定される。294 は口縁部無文帯と連結する「S」字状文を磨消縄文で描く個体。291～293 と同様緩やかに開きながら立ち上がる器形を有し、口縁部突起を有していたものと推定されるがいずれも欠損している。295・296 は沈線を施文する口縁部破片。297・298 は同一個体で、頸部無文帯と胴部充填縄文が連結する、キャリバー形の器形を呈すると想定される個体の口縁部片。299 は頸部にぐいれを持つ個体の胴部片で、無文帯下に横位の刺突列が施されるほか、上位に沈線による「C」字状文、胴部に波状文の一端と思われる沈線文が描かれる。300 は充填縄文により胴部に「J」字状文を描く深鉢。緩やかに開きながら立ち上がる器形をもち、口縁部には小突起を有し突起上にボタン状貼付が付与される。301～304 は沈線で波状文が施文される口縁部片。305・306 は同一個体で、上位に無文帯・胴部に磨消縄文により文様が描かれる大型の壺形片。底面には網代痕が顕著に遺り、器質等からみて搬入品と想定される。307 は磨消縄文を施す胴部破片。308 は 305 と同様の器形をもつと思われる個体の胴部片で、沈線による波状文が描かれる。309 は沈線により入組波状文が施された底部。310 は 305 と同様の器形を有するが縱走する撚糸文を施すもの。311 は口縁部無文帯・胴部の「S」字状縄線文などが大木系に近似する深鉢。

IV群B類（第 II-78～80 図、写真図版 50・51）

縄文時代後期前葉の土器群。

IV群B類 1種（第 II-78・79 図 312～335、写真図版 50・51）

縄文時代後期初頭～前葉、十腰内 I 式の前段階に相当するもの。同期の分類には諸説あるが、ここでは葛西勲による編年（葛西 2002）に依った。

312 は波状口縁をもつ口縁部片で、突起下には細めの垂下降帯が貼付され、それを軸に三角状モチーフなどの沈線文が展開する。牛ヶ沢（3）期～螢沢 I 期に並行するものと想定される。313～322 は沈線文を主体とし、螢沢 I 期に並行すると思われるものの。313～317 は波状を呈する厚手の折返口縁をもつ個体で、313 は渦巻文、314 は突起下に垂下する蛇行沈線、315 は突起下蛇行沈線とそれを軸として施文される斜行沈線、垂下沈線を軸として「个」字状に展開する沈線文がそれぞれ施文される。317 は 313～316 と同様の器形的特徴を持つ小型の深鉢。318・319 は同一個体で、垂下する沈線を軸に沈線が三角形文をなすよう施文されるもの。320 は波状口縁をもつ深鉢。320・321 は波頂部下に垂下する蛇行沈線を施し、口縁部直下に左右に展開する磨消縄文による無文帯を有することから螢沢 I 期に並行すると想定される。322 は沈線文のみが施文される小型の個体。胴部に展開する三角形文から螢沢 I 期に並行するものと想定される。323～325 は二条 1 組の縄線文で三角形文・渦巻文を施文する個体。324・325 は同一個体で縄線

文間を磨り消しており、近似した文様構成を有する 323 も含め、螢沢Ⅰ期に並行する個体と想定される。326 は壺形土器の口縁部で、螢沢Ⅱ期に相当すると思われるもの。327 は格子状モチーフを隆帯で施する螢沢Ⅱ期相当の壺形土器。328~331 は沈線で横長の長楕円形文を描く個体。小片のため文様の全体像が判然としないが、特に 330 は突起下に垂下した二個の円形沈線を軸として長楕円形文が左右に展開するなど螢沢Ⅱ期以降のより新しい段階にみられる施文的特徴を有することから、それらに並行する可能性がある。332~335 は沈線文のみを施す破片。334 は横位の長楕円形文が多用されるなど、小牧野Ⅲ期に並行するものと想定される。335 は渦巻文が描かれた胸部片。

IV群B類2種（第II-80図336~342、写真図版51）

縄文時代後期前葉・十腰内I式併行・大津式・白坂3式に相当するもの。

336 は頭部にくびれを持ち口縁部でやや広がる器形の深鉢で、波状口縁を呈すると思われる。口唇に沿って二条1組の沈線文を巡らした後、直下に同心半円状の沈線文を鱗状に展開する。器形・沈線文を主体とする等の特徴から、十腰内I式の古手に相当するものと推定される。337~340 は大津式に相当するもの。337 は口縁部片で、二条1組の沈線により描かれる弧状の沈線文を組み合わせた文様をもつもの。337~340 は集合沈線文を描くもので、339 は口縁部片、339・340 は胸部片。340 はカニバサミ状のモチーフが描かれる。341・342 は白坂3式。341 は口縁部片。小波状をなし、波頂部を軸に同心三角状沈線文が展開する。口縁部文様帶下には「く」の字状の沈線が列状に施文される。342 は頭部付近の破片で、頭部沈線下に同心三角状沈線文が施されるもの。

IV群C類（第II-80図343~347、写真図版52）

縄文時代後期中葉・ウサクマイC式・手稿式に相当するもの。

343 はウサクマイC式の口縁部片。344~346 は手稿式。344 は台付鉢。口縁部は肥厚する突起をもつ波状を呈し、隆帯によって区画される無文帶をもつ。隆帶上には縄線によるキザミが施される。隆帶直下の胸部上半の文様帶には縄文を施した後に平行沈線文が施文され、さらに弧状の沈線で縦に区切られる。底面は鉢部ではなく台部の底に作出されており、器壁は内外面ともに密な調整を加えられている。345・346 は同一個体で、344 と同様の器形をもつものと想定される個体。頭部沈線帶は幅広の「S」字状沈線の連結によって描かれる。347 は 345・346 と同様の平行沈線文を施す胸部破片。

IV群D類（第II-81~82図348~369、写真図版52・53）

縄文時代後期後葉・堂林式に相当するもの。地文は筋の細かな原体による斜行縄文、あるいは異然の原体を交互に規則正しく横回転押圧した羽状縄文が主体である。

348~354 は磨消縄文で文様を描く口縁部破片。348~350 は I O 突瘤文が施されるもの。348・349 は口縁部文様帶にさらに平行沈線が加えられる。351~354 は貼瘤が施されるもので、比較的新手の個体。351 は縦位の貼瘤列を軸に2条1組の弧状沈線文が展開する。352・353 は貼瘤を中心と磨消縄文が展開する。354 は貼瘤にさらに刺突が加えられるもの。

355~362 は I O 突瘤文列の施された口縁部破片。355・357・358 はさらに沈線文を加えるもの。

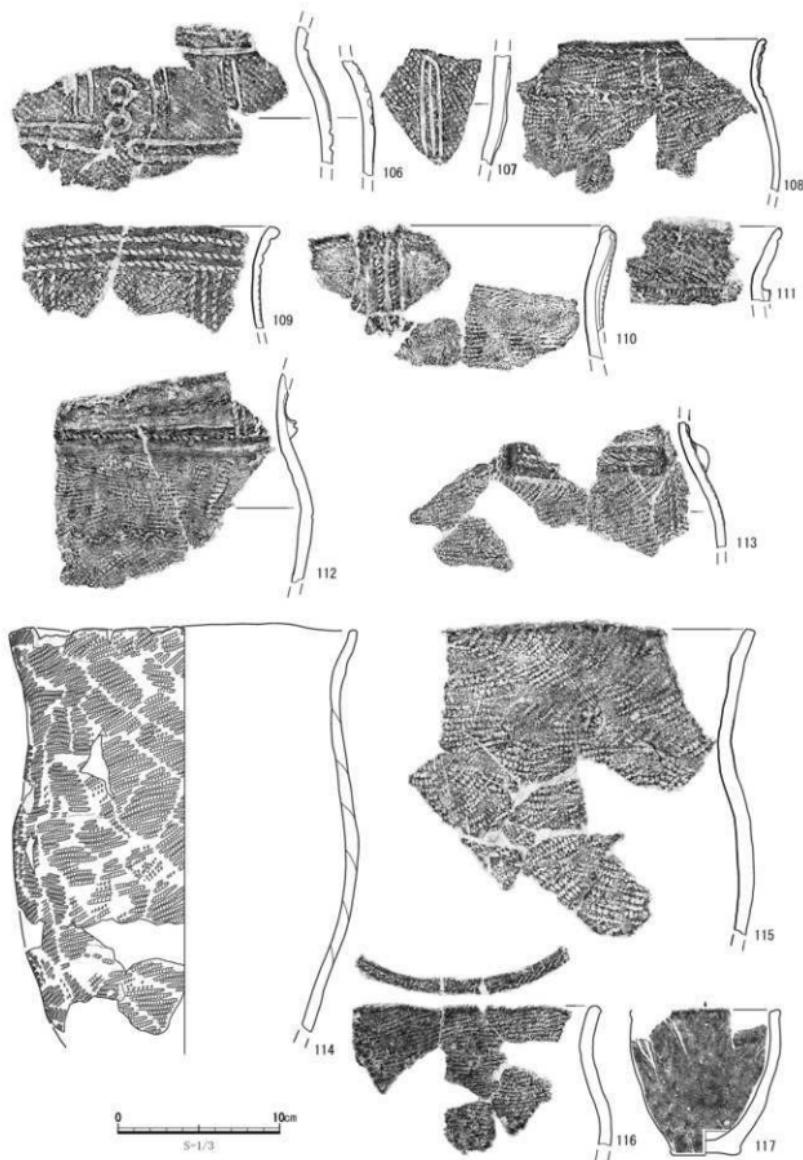
363~366 は摘み上げを加えた I O 突瘤文の施される口縁部破片。363~365 はさらに平行沈線を加える。

367 は弧状モチーフを主体とした磨消縄文の施される胸部破片。368 は胸部破片で、348 と同一個体。

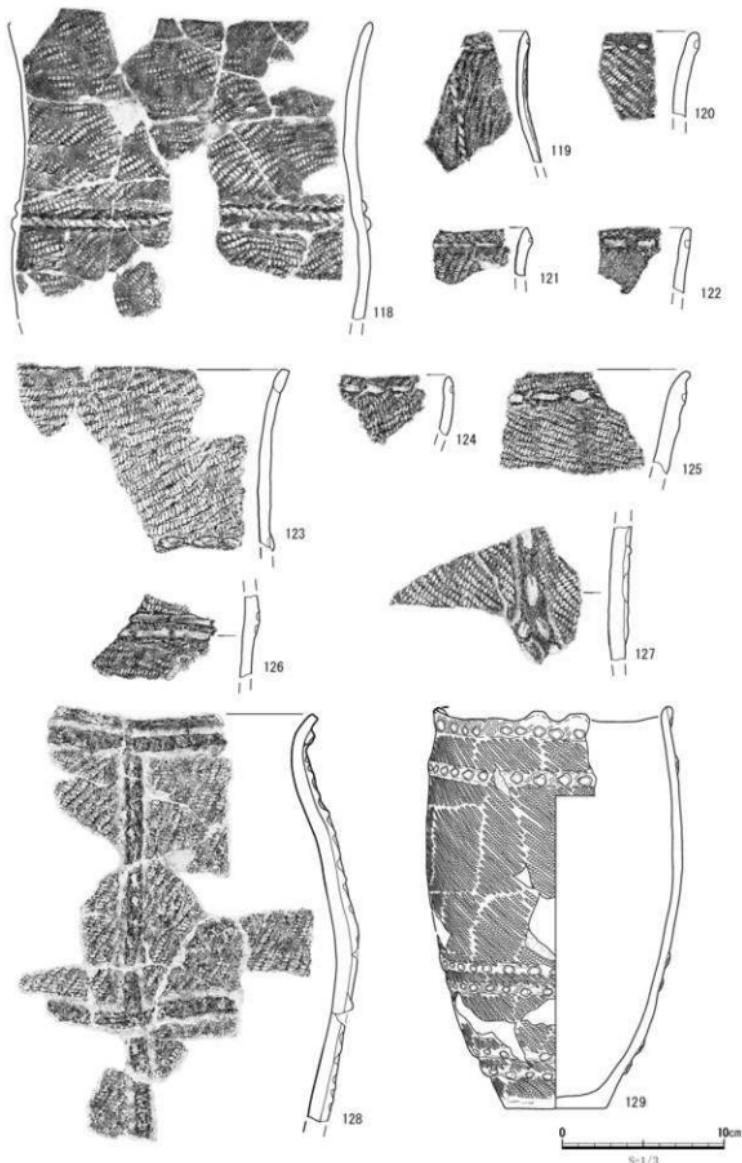
369 は突瘤・貼瘤をもたず、磨消縄文によって胸部に三叉文様のモチーフが描かれるもの。土肥研晶による編年（北海道埋蔵文化財センター2001）におけるVI~VII期、堂林式後半期に相当すると推定される。

V群：縄文時代晩期（第II-82図370、写真図版53）

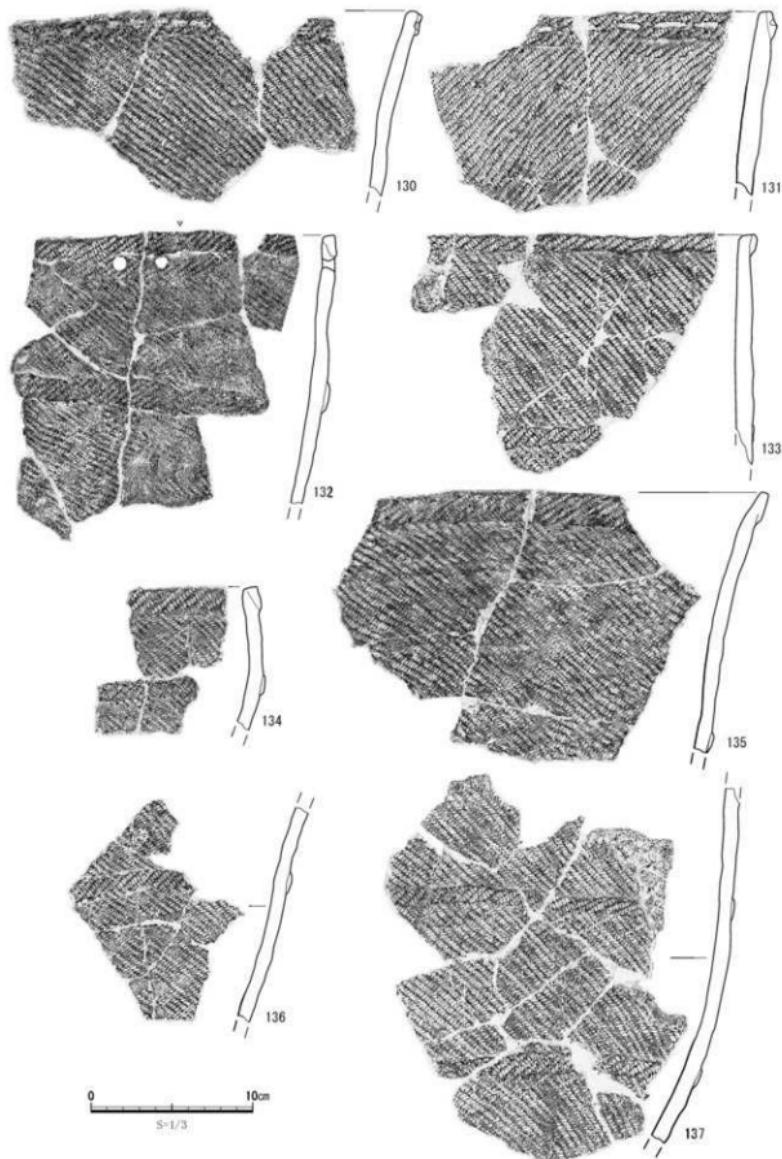
370 は口縁部片。口縁端部に平行沈線が2条巡り、さらに垂下する沈線によって工字状に連結している。大洞A式に相当するものと推定される。



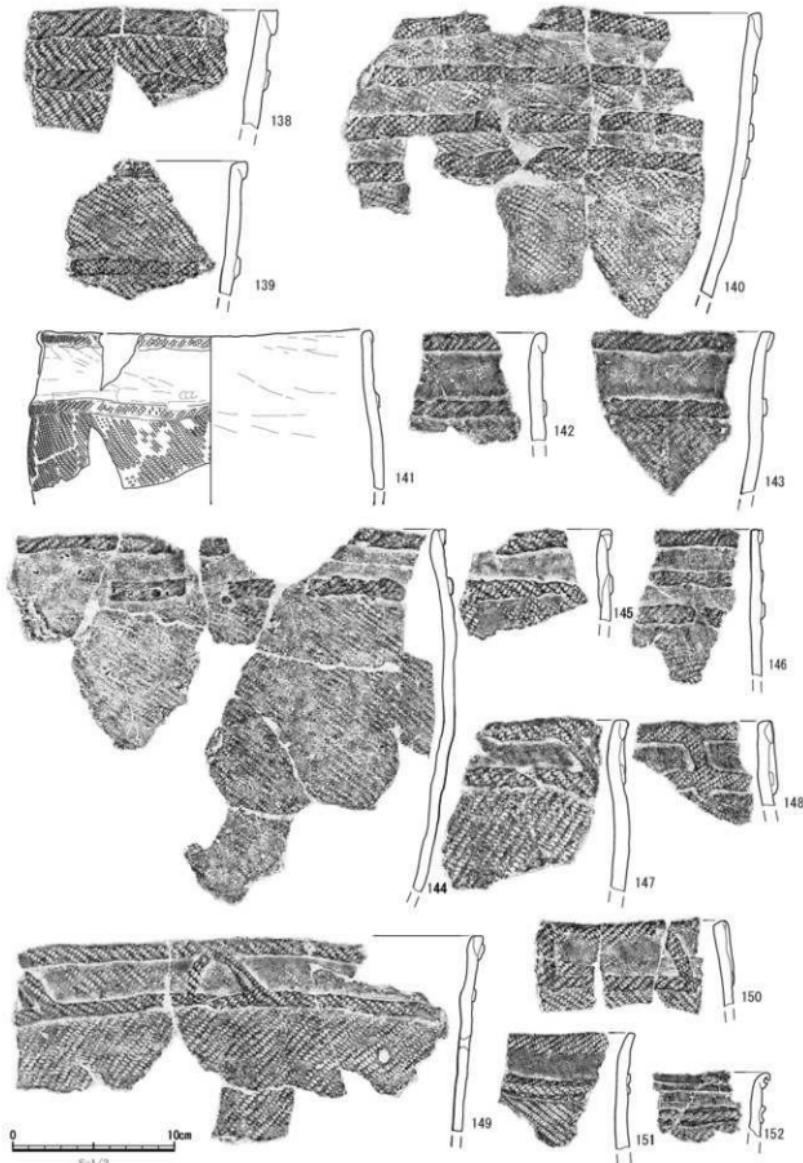
第II-59図 遺構外出土の土器(19)



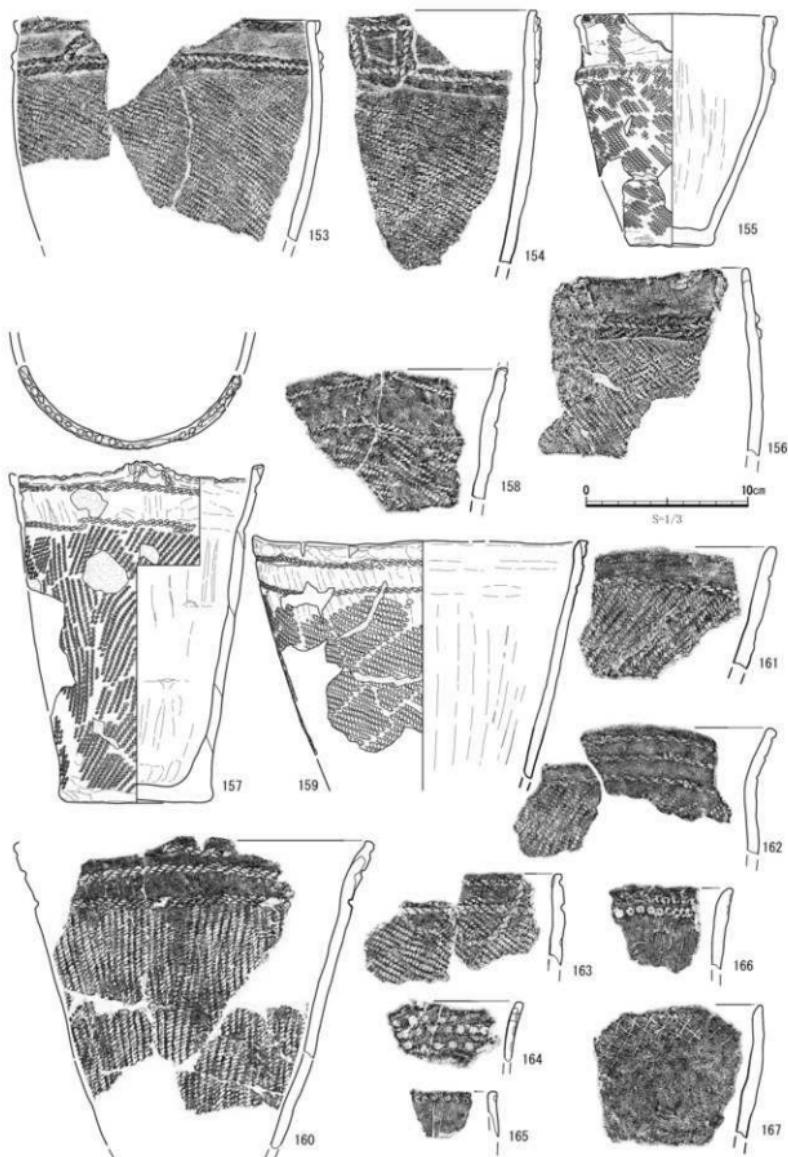
第II-60図 遺構外出土の土器(20)



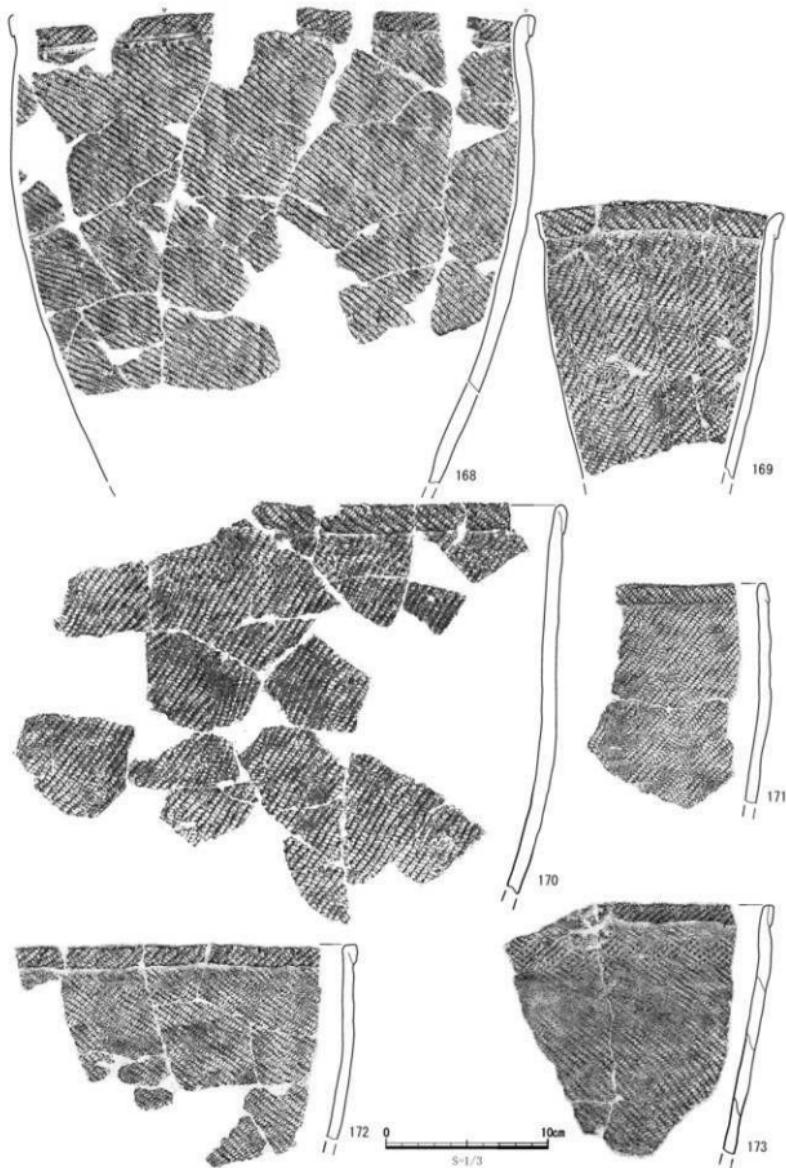
第II-61図 遺構外出土の土器(21)



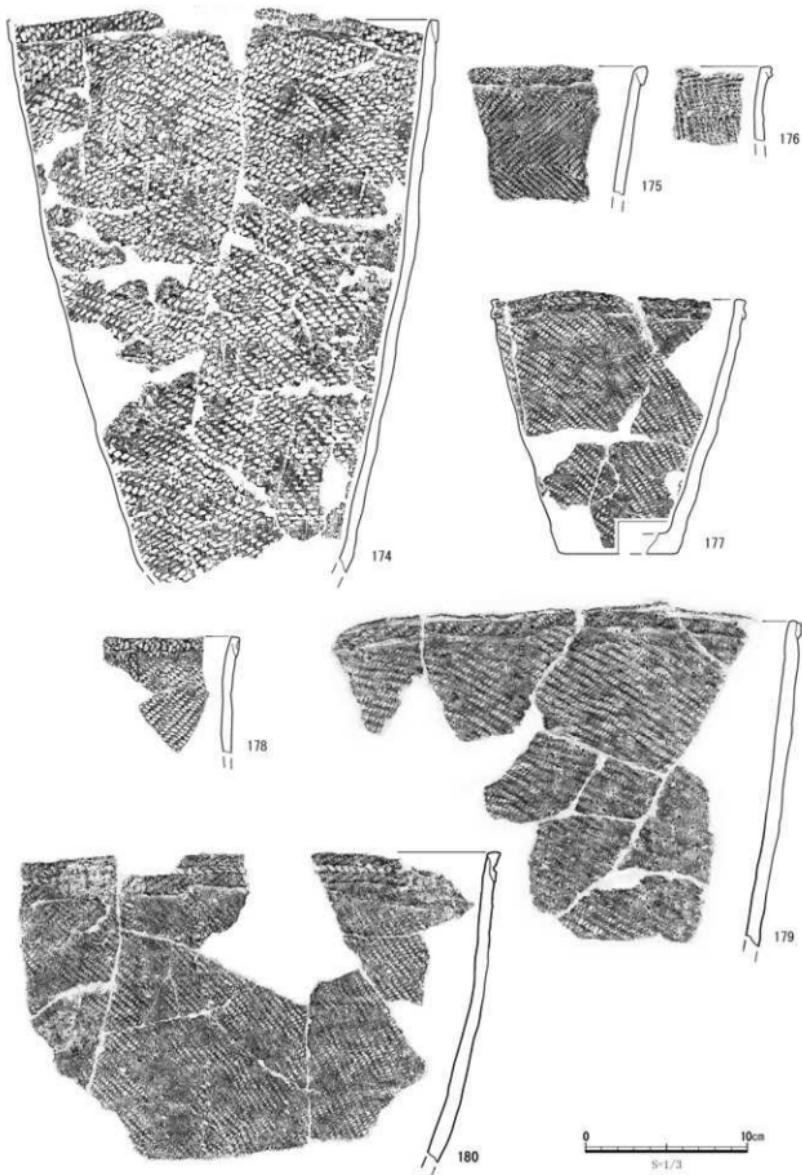
第 II-62 図 遺構外出土の土器 (22)



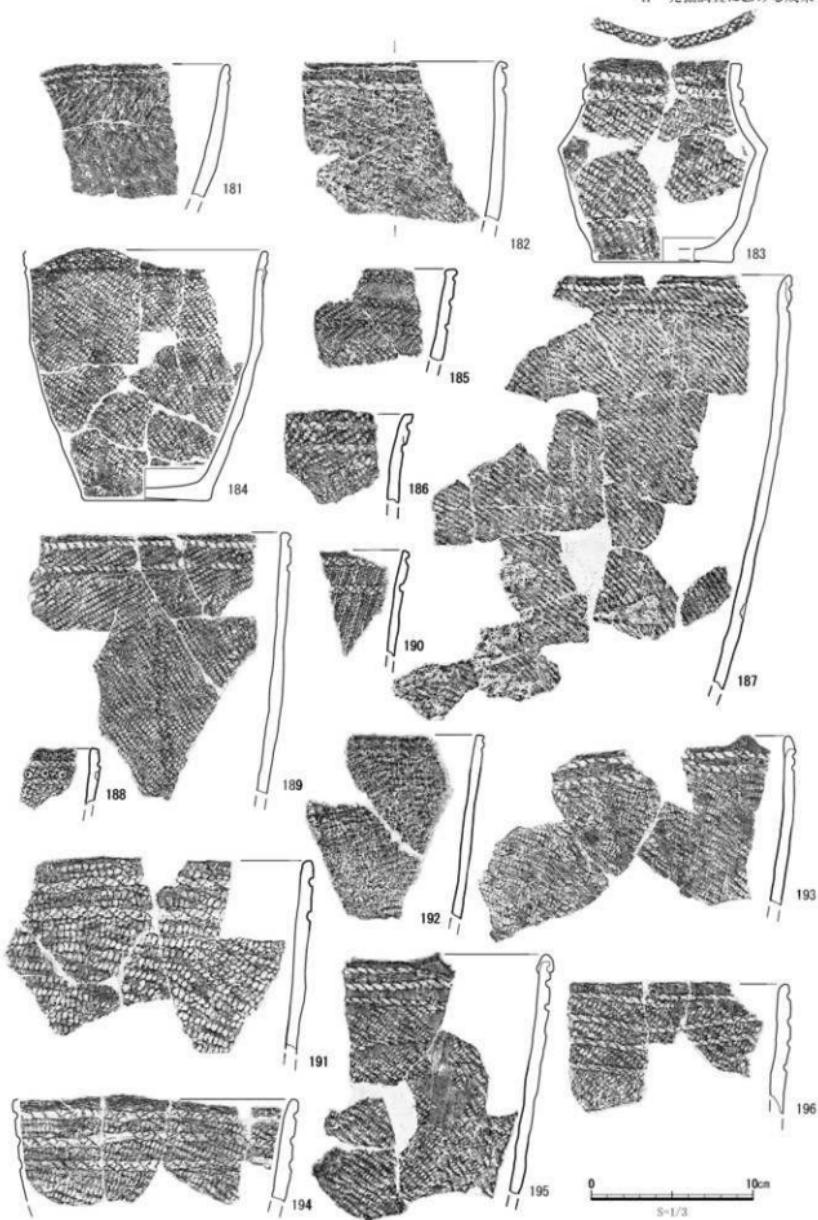
第II-63図 遺構外出土の土器(23)



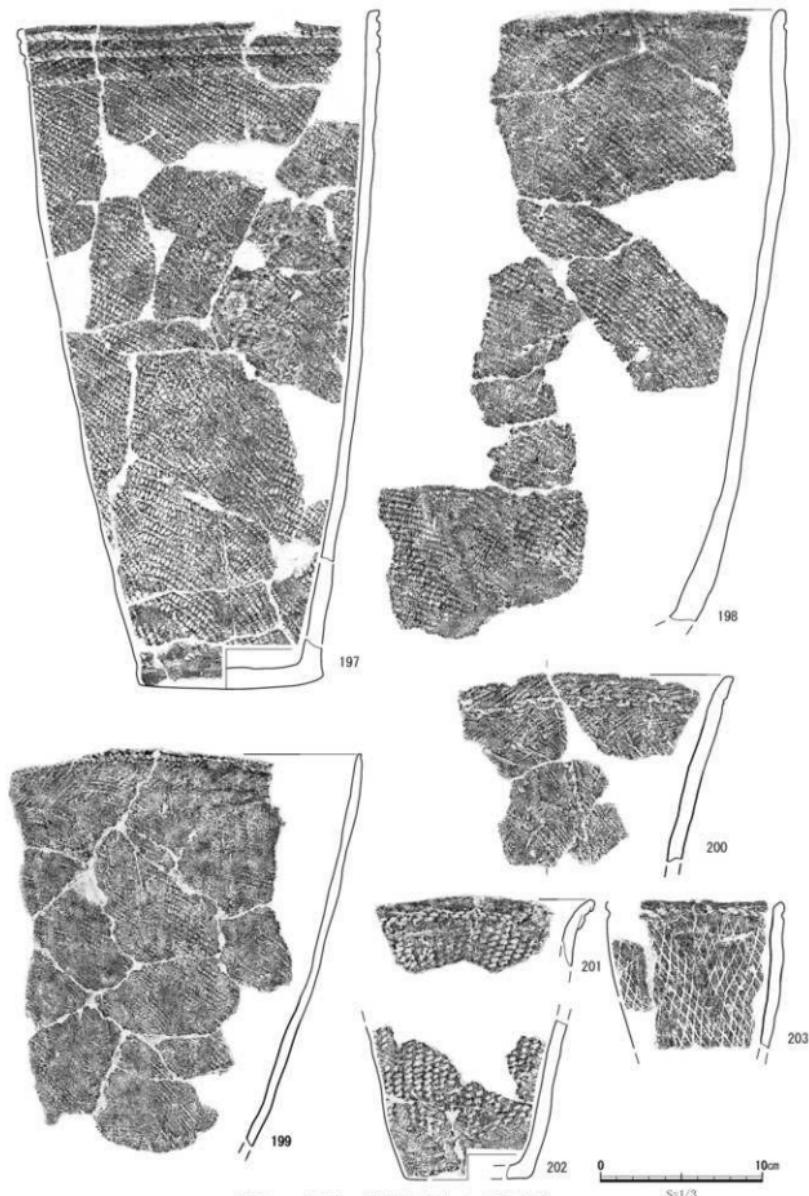
第II-64図 遺構外出土の土器(24)



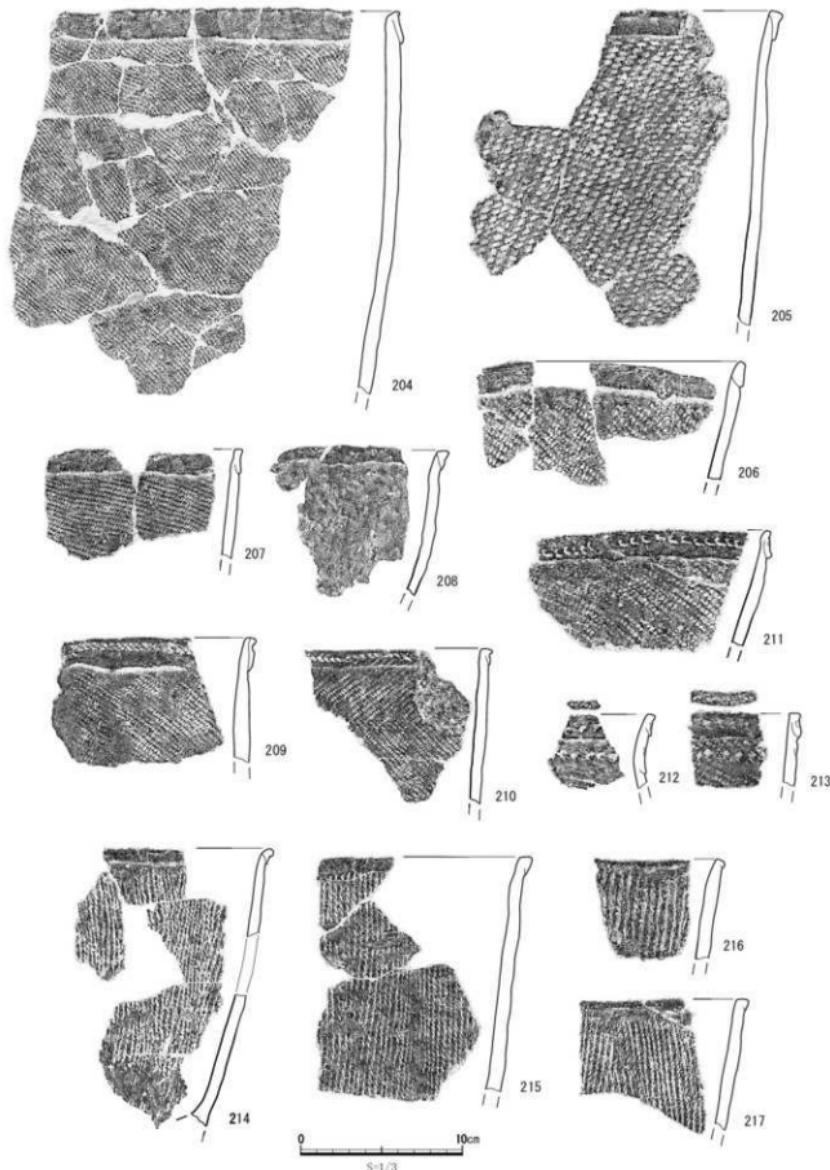
第II-65図 遺構外出土の土器(25)



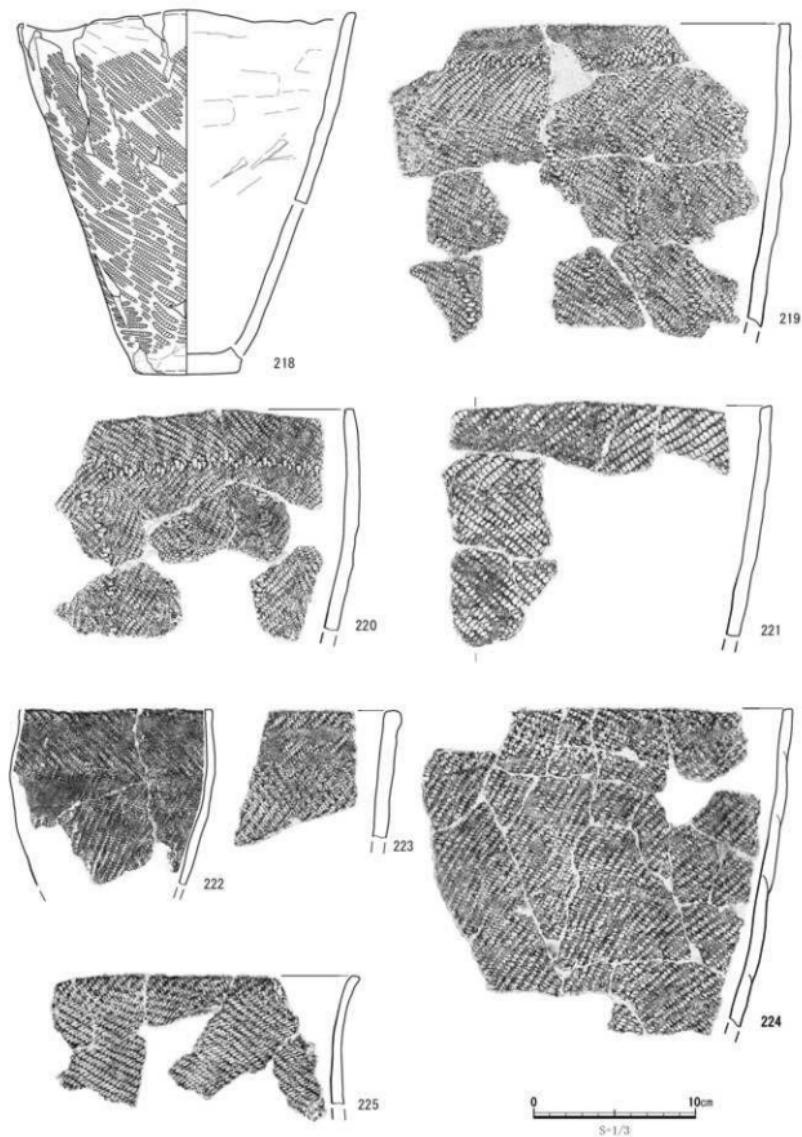
第II-66図 遺構外出土の土器 (26)



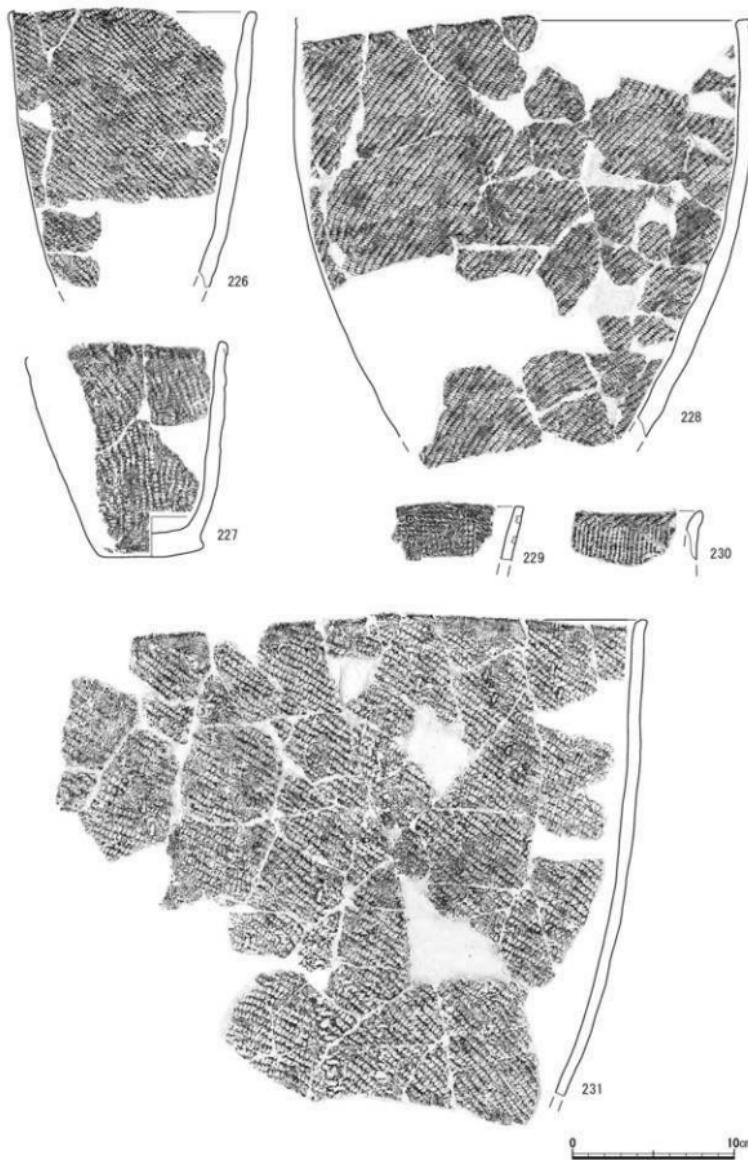
第II-67図 遺構外出土の土器(27)



第II-68図 遺構外出土の土器(28)

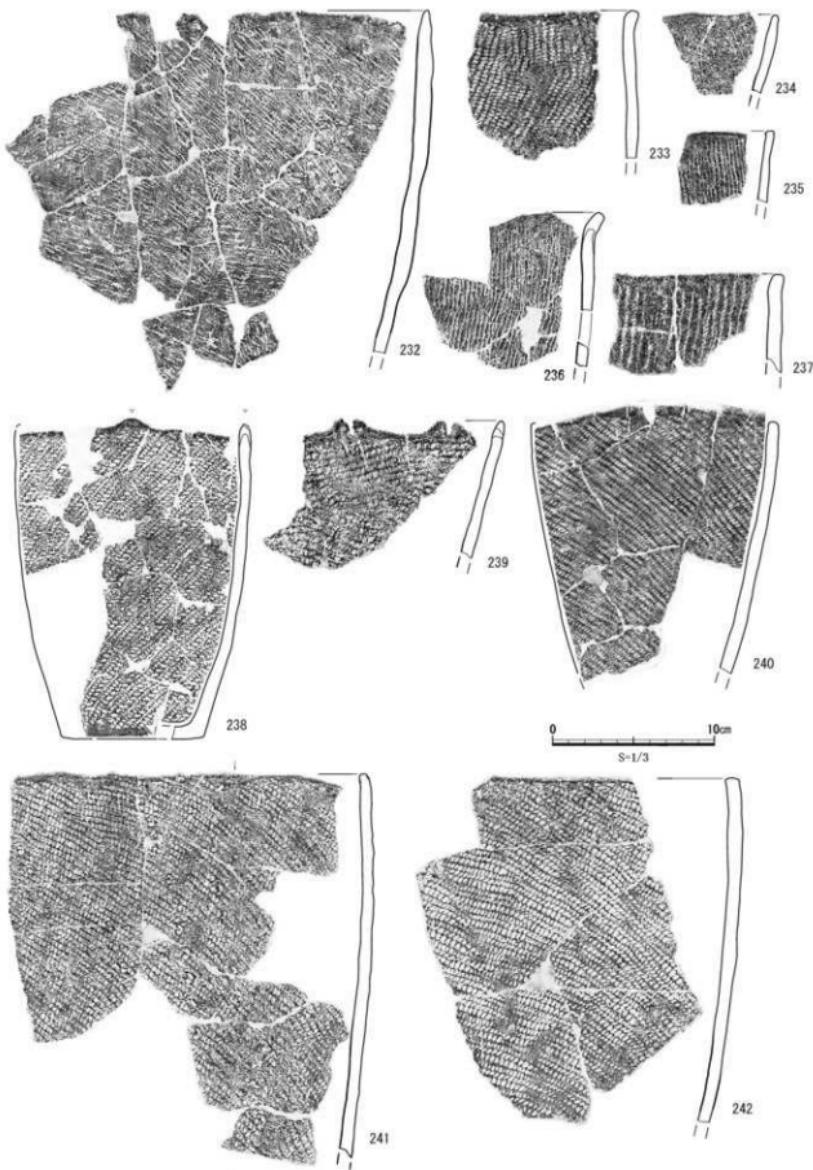


第II-69図 遺構外出土の土器 (29)

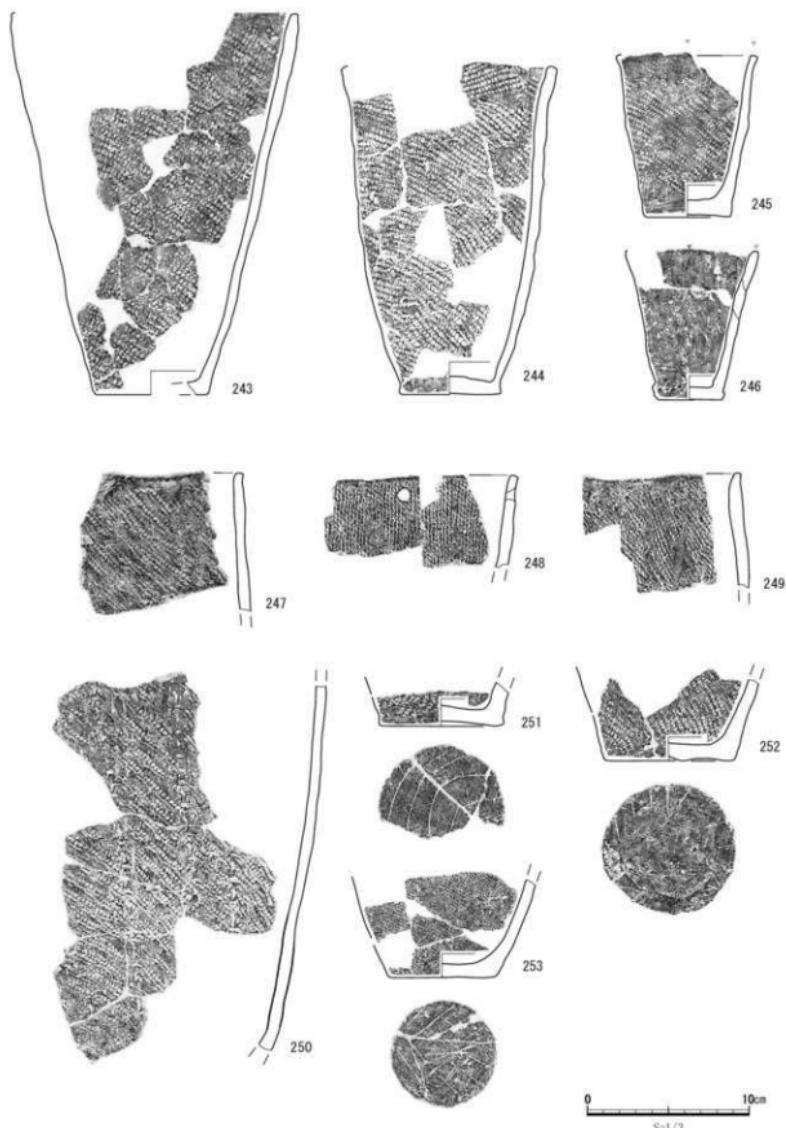


第II-70図 遺構外出土の土器(30)

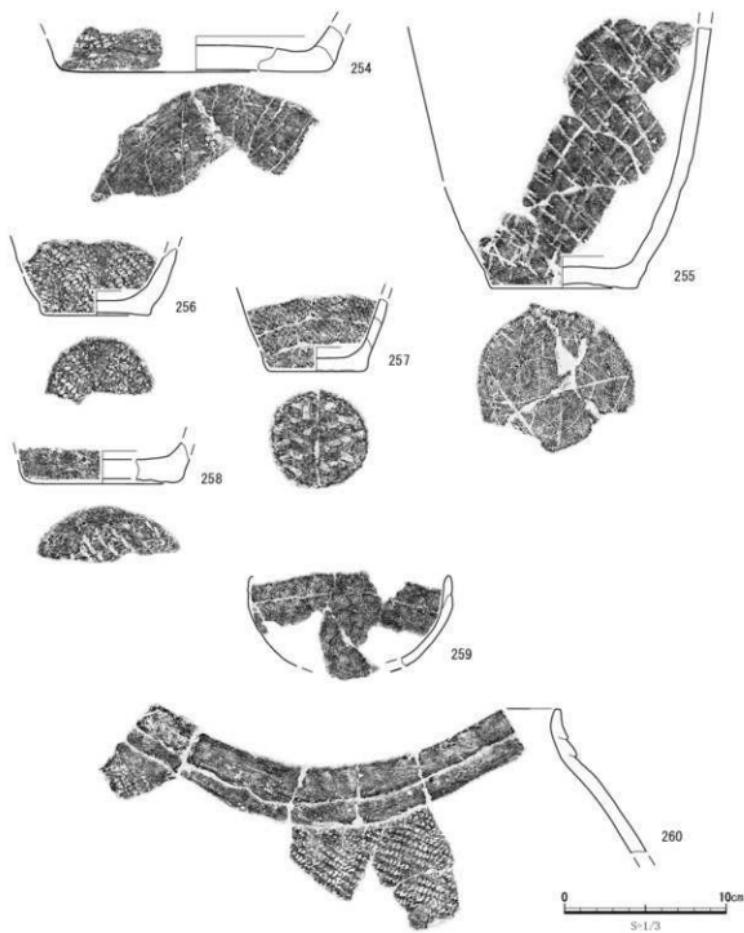
II 発掘調査における成果



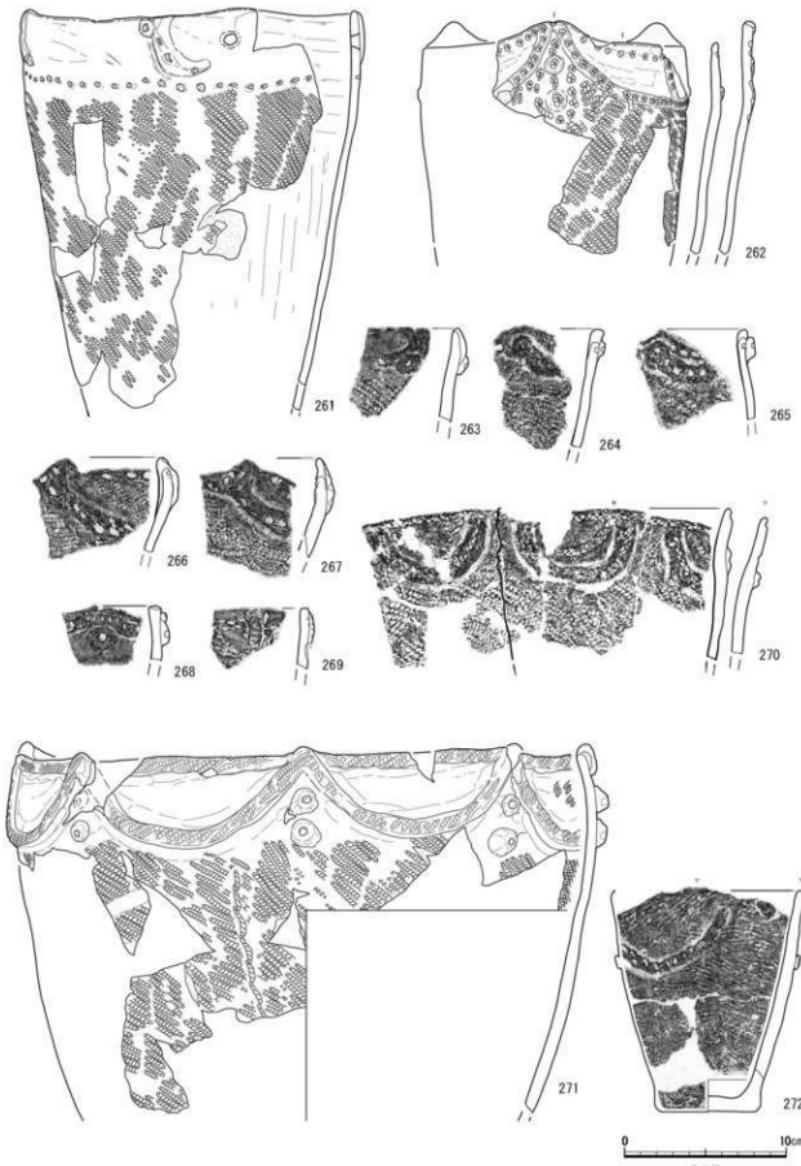
第II-71図 遺構外出土の土器 (31)



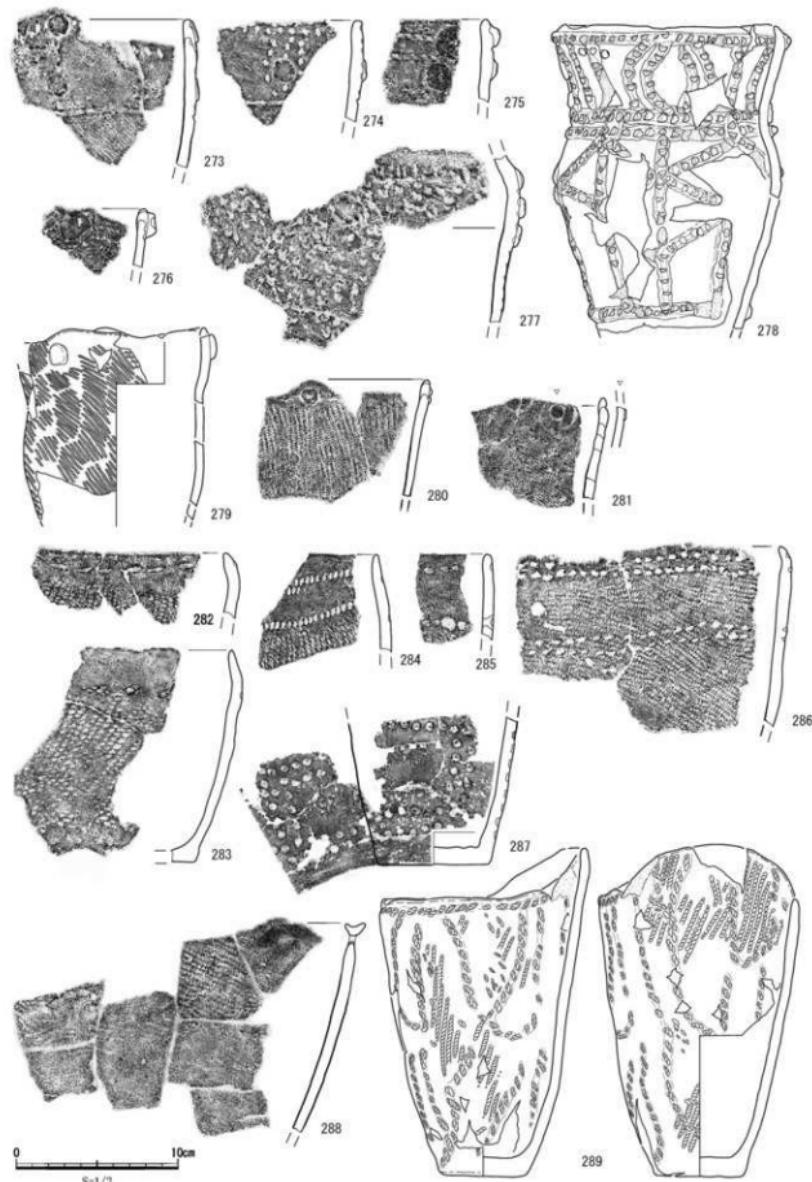
第II-72図 遺構外出土の土器(32)



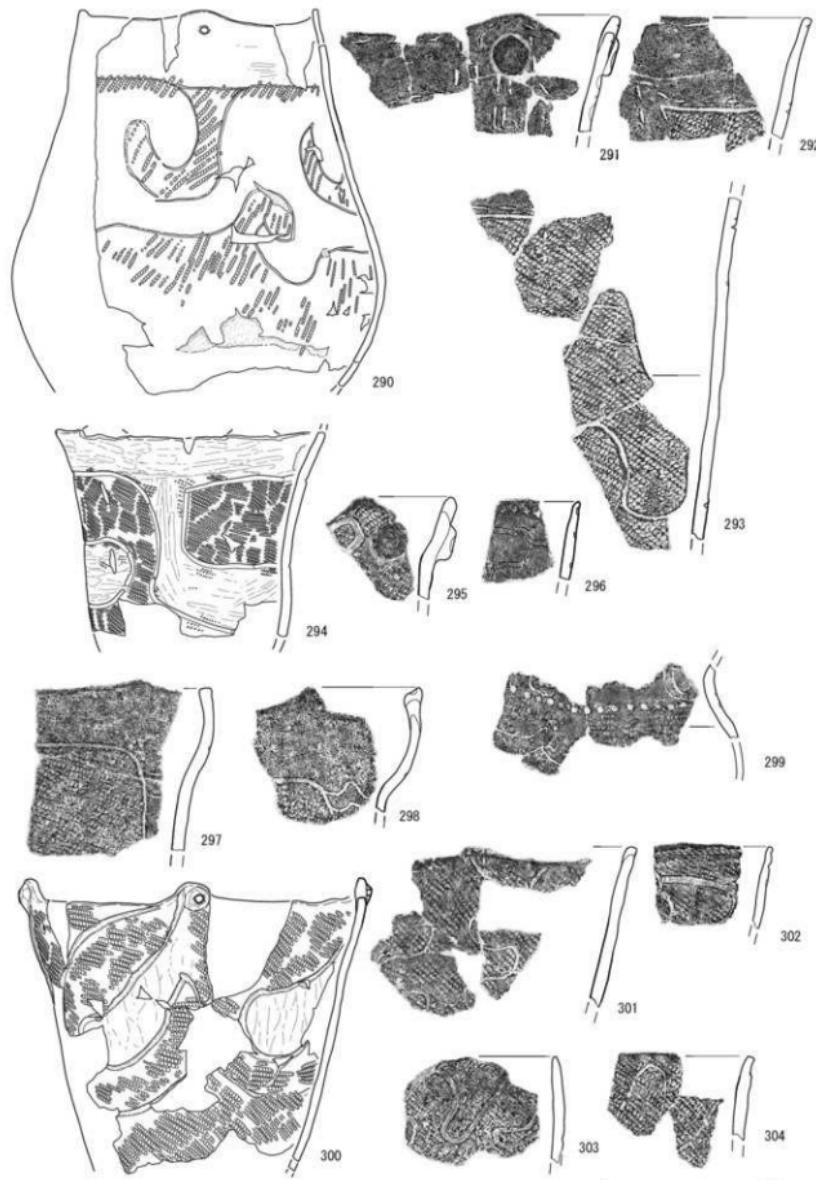
第II-73図 遺構外出土の土器 (33)



第II-74図 遺構外出土の土器(34)



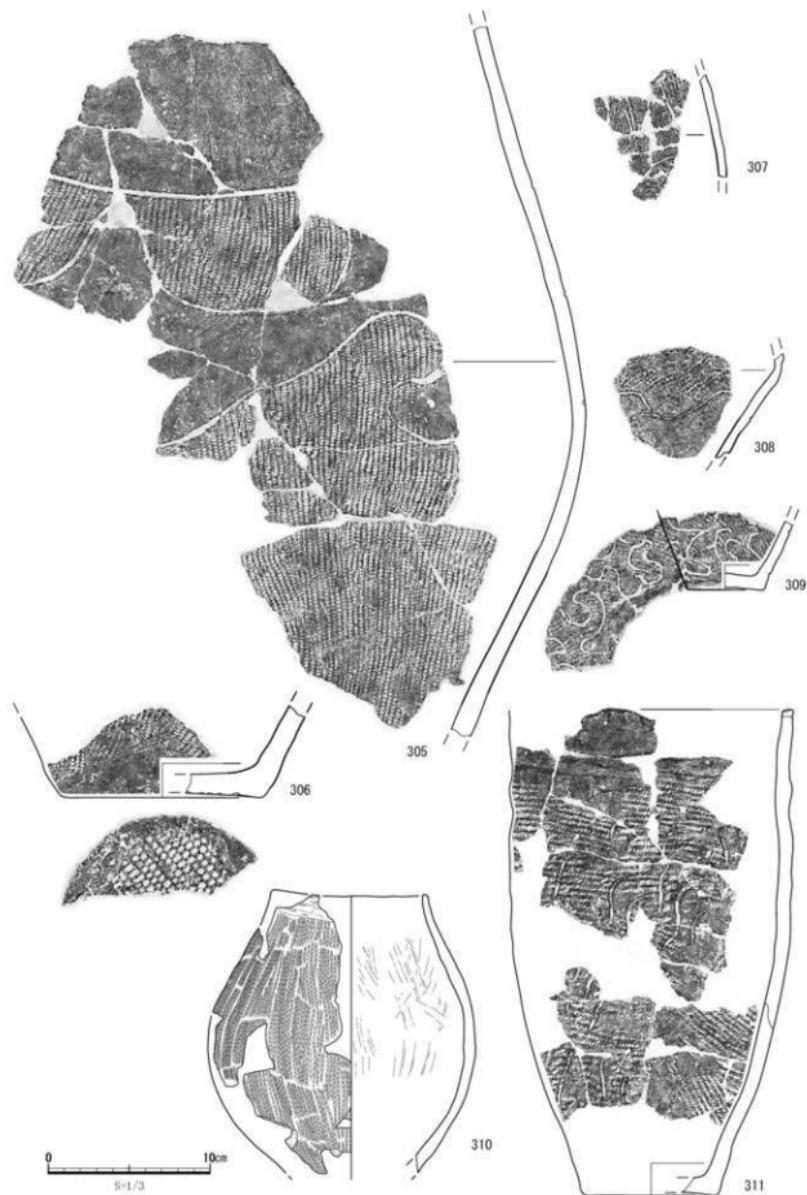
第II-75図 遺構外出土の土器 (35)



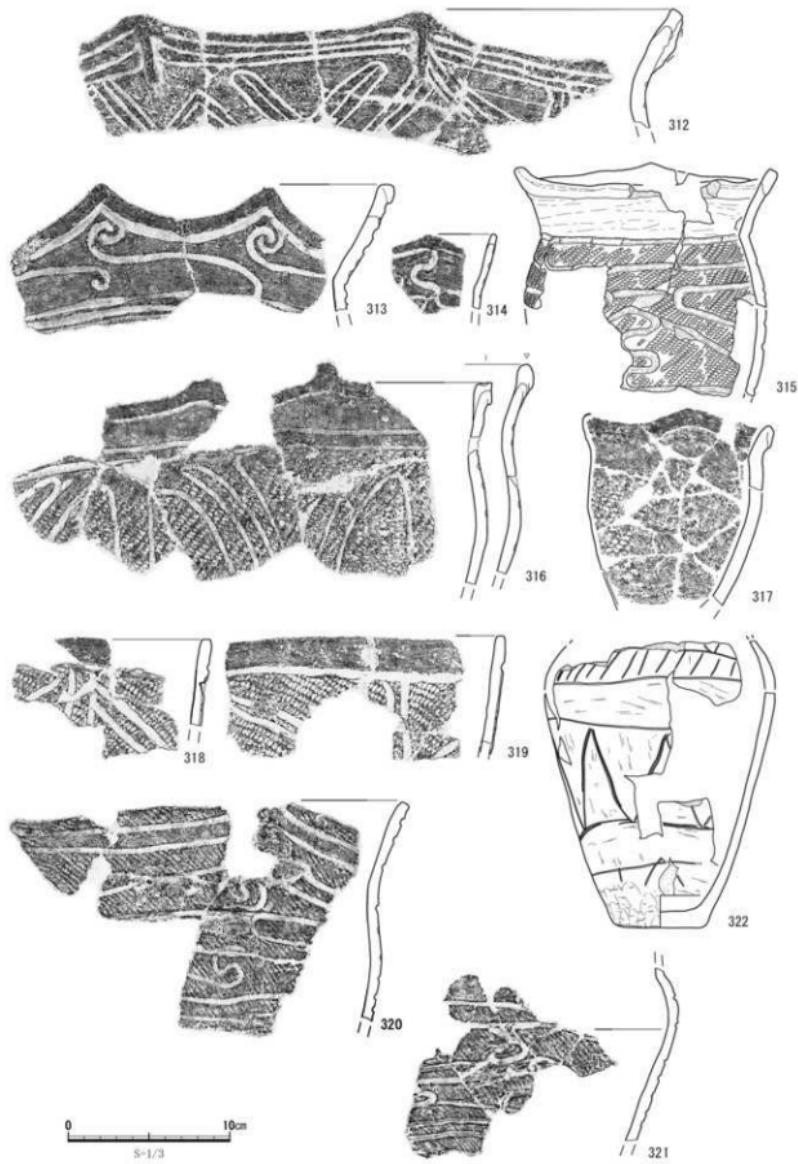
第II-76図 遺構外出土の土器 (36)

0
S-1/3
10cm

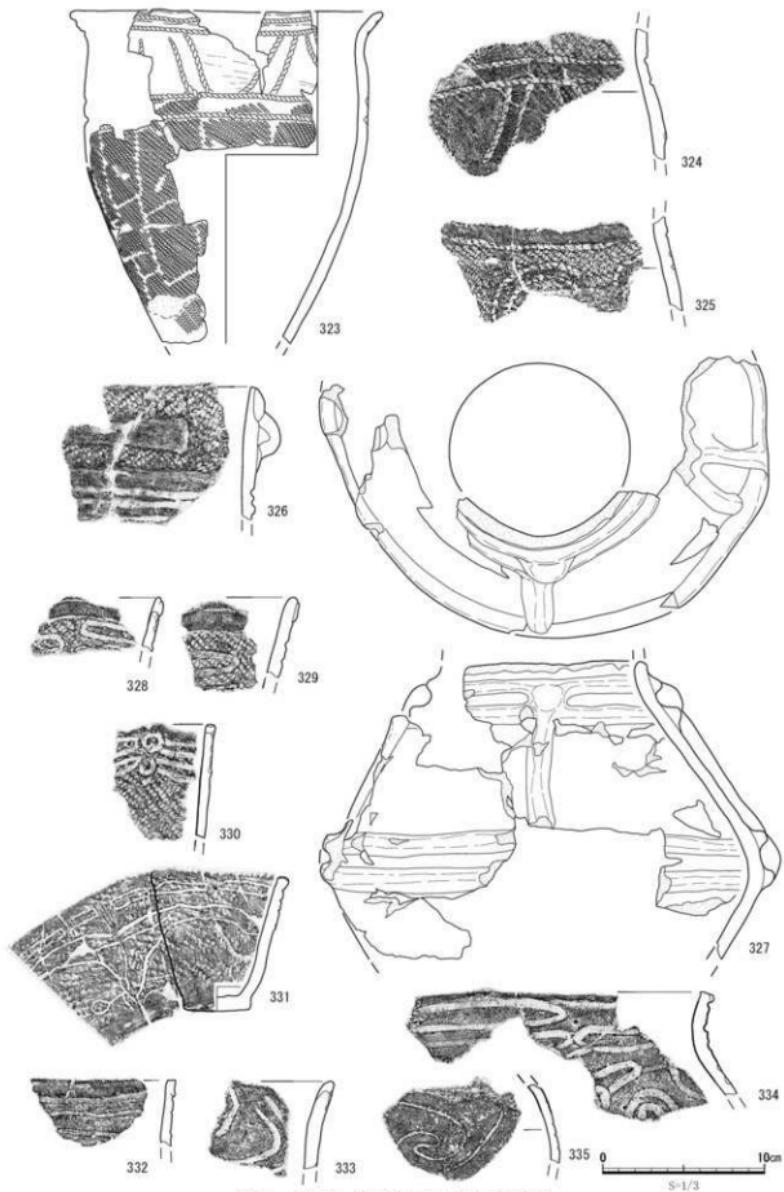
II 発掘調査における成果



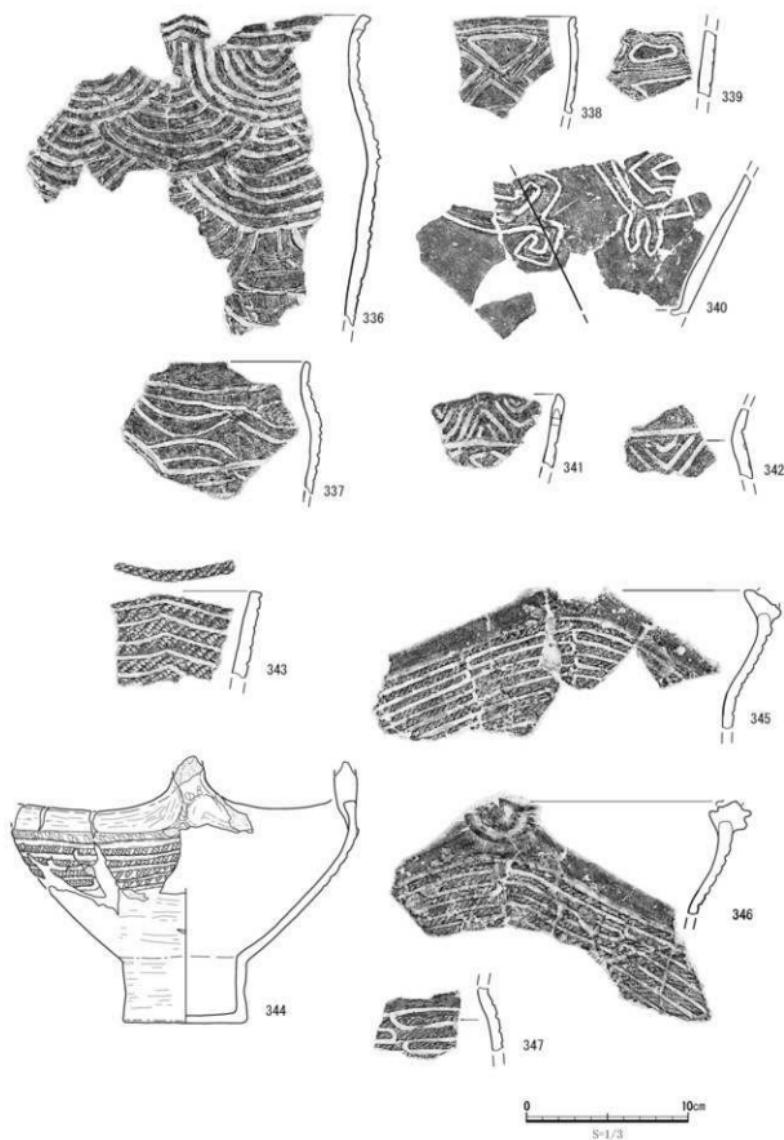
第II-77図 遺構外出土の土器(37)



第II-78図 遺構外出土の土器 (38)

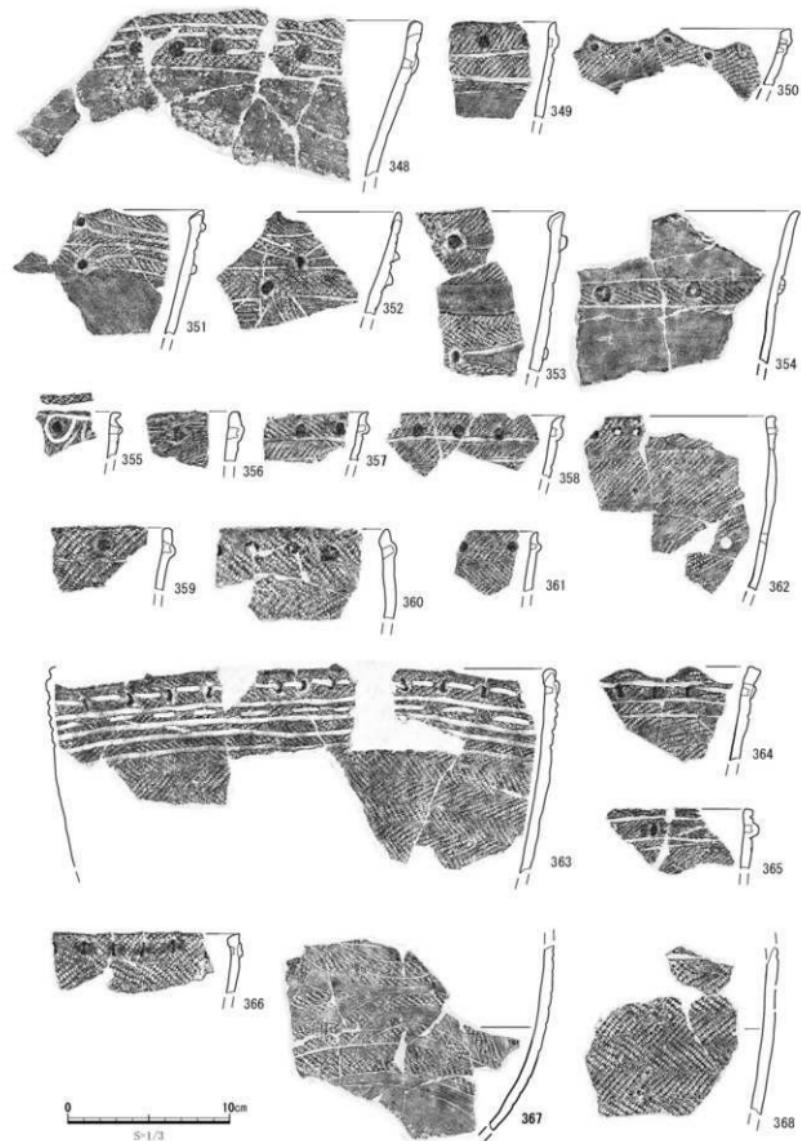


第II-79図 遺構外出土の土器 (39)



第II-80図 遺構外出土の土器 (40)

II 発掘調査における成果



第 II-81 図 遺構外出土の土器 (41)